

2007年度  
「学生による授業評価アンケート」  
報告書

2007年度「学生による授業評価アンケート」実施委員会



立教大学

2008年11月

## はじめに

総長 大橋 英五

本学の「学生による授業評価アンケート」は、2004 年度に開始され、この報告書は第 4 回にあたる 2007 年度調査の分析結果をまとめたものである。調査に協力されたすべての学生、勤務員に感謝したい。

本学の「学生による授業評価アンケート」は、2004 年度から 2006 年度までの当初 3 年間は、1 教員 1 科目の原則で実施してきた。これにより、教員個々人の授業改善への意識が高まり効果が上がったことは、各項目の数値が有意に上昇したことからも明らかであり、全体として大きな成果をもたらした。

しかしながら一方では、繰り返しによる効果の低下を懸念する声もあり、同じ方式でアンケートを継続することを避け、教学改善により有効に活用できる方向性を探る必要性が訴えられていた。

そこで 2007 年度は、スタート時に確認された目的のうち、「学部・学科としてカリキュラムの有効性を測定するための資料を得る」「大学として教育力向上に必要な方策を立てるための資料を得る」により比重を移し、実施することとした。具体的には、対象科目および科目選定方針に柔軟性を持たせ、1 教員 1 科目の原則に限定せず、各学部・学科等の必要性に応じて選定を行うことを可能とした。

科目選定方針の変更に伴い、新たな集計方法として「グループ集計」を取り入れた。これにより、同一シラバスで開講する科目や初年次の基礎演習科目などに学部等が独自に設定したグループにおいて、科目間の比較・検証が可能となった。学部等においては、カリキュラム改善に資する有益な情報が得られ、授業評価アンケート結果の更なる活用が図られたことと思う。

本報告書が学内、学外を問わず多くの方々に読まれ、本学のさらなる教育改善に資することを期待している。

# 目次

はじめに	
1. 授業評価アンケートの実施目的	1
1-1 目的	1
1-2 「報告書」作成の基本的な考え方	3
1-3 「所見票」について	3
1-4 2007年度の実施科目の選定方針	4
2. 授業評価アンケートの実施概要	7
2-1 実施方式	7
2-2 設問項目	7
2-3 実施科目の選定方針	11
2-4 実施科目数	12
2-5 実施期間	12
2-6 回答者数	13
2-7 「所見集」の公開	13
3. 科目担当者・学部等への集計結果のフィードバック	15
3-1 科目担当者	15
3-2 学部等	15
4. 学部等総評	19
4-1 文学部	20
4-2 経済学部	22
4-3 理学部	24
4-4 社会学部	27
4-5 法学部	30
4-6 経営学部	33
4-7 観光学部	36
4-8 コミュニティ福祉学部	41
4-9 現代心理学部	43
4-10 全学共通カリキュラム	46
4-11 学校・社会教育講座	50
5. 2007年度のまとめと今後の展望	53
6. 集計データ（資料編）	55
6-1 回答者数	55
6-2 科目開設学部等別平均値	56
6-3 「グループ集計」科目一覧	67

## 1. 授業評価アンケートの実施目的

本学における授業評価アンケートは、2004年度から毎年実施しており、その実施目的は開始以来これまで変更しておらず、初年度である2004年度報告書に書かれている通りであり、以下にそれを転載する。

また、実施目的は変更していないが、アンケート4年目である2007年度から、実施対象科目の選定方針を変更した。詳しくは「1-4 2007年度の実施科目の選定方針」(p.4)を参照されたい。

### 1-1 目的

本学における全学規模の学生による授業評価アンケートは、2002年7月10日に総長に提出された「全学FD検討委員会答申」に始まる。その中で、本学にとっての最重要FD課題として次の3点が挙げられている。第一に「教員における授業力の向上」、第二に「カリキュラム編成の合理化」、第三に「成績評価の厳正化」である。そして、その中でも緊急性がもっともあるとされたのが第一の課題であり、その中で「授業力向上に向けての具体策」のひとつとして挙げられていたのが「学生による授業評価の制度的実施」である。それを受けて、2002年12月18日付け文書「FDについて—学生による教育評価アンケートの2003年度実施に当たって—」の中で総長は、敢えて「教育評価」という言葉を用い、「個々の科目の授業やその担当教員への評価をこえて、広く本学の教育について、学生の評価を参照したい」と述べ、「学生による教育評価アンケート」をできる限り早期に実施したいとの方針を明らかにした。

それを受けて直後の2002年12月21日には早くも全学教務委員会FD専門部会の第1回部会が招集され、年度をまたいで検討が続けられた。その過程で、2003年度実施は見送られ2004年度実施を目標とすること、施設その他の教育条件一般を問うアンケートの前に、授業そのものに目標を絞って問うことなどの合意が形成され、「学生による授業評価アンケート」を行うことが決まった。そして、具体的アンケート項目作成作業が開始され、他大学のものをも参照しつつも、三つの独自案にまとまってゆき、並行して行われていたアンケートの目的や実際の実施方法などの検討結果とも連動しながら、最終的にひとつの案に集約されていった。その結果は部長会に報告され、了承を得て、その後、各学部教授会とのやり取りがあり、2003年の秋に2004年度前期から「学生による授業評価アンケート」を実施することが正式に決定した。そして、2004年度4月から「学生による授業評価アンケート実施委員会」が立ち上げられ、前期と後期に実施された。

その実施の目的は、部会における議論の結果、以下の点にあると考えられるにいたった。

- ① 教員が自らの授業改善を目指す自己研修の資料を得る。
- ② 教員同士が授業に関して相互研修をおこなう機会を提供する。
- ③ 学生の学習姿勢を知るための資料とする。
- ④ 学生の授業への期待のありかを知る資料を得る。
- ⑤ 学生に授業履修への積極性と責任意識を喚起する。
- ⑥ 学部・学科としてカリキュラムの有効性を測定するための資料を得る。

⑦ 大学としての教育力向上に必要な方策を立てるための資料を得る。

以上である。

要するに、本学の「学生による授業評価アンケート」は端的に言って、個々の教員による授業を、学生がより充実して学習を進め大学としての教育力が今より一層効果的に機能することを目指して改善し、その結果として学部・学科としての教育力をも増進することを唯一の目的とする、ということである。そうして、学生をも巻き込んで、本学が知的に活発で、創造性に富み、常に先進的に新しい知を発信し、それに基づく生き方を常に提案し続ける力を保持することができるようになることを最終目的とする。

それに対して、場合によっては教員の活力を削ぐことになりかねない教員管理の視点は厳しく排除される。大学は教職員と学生が相互に自己管理することを前提に、自由に精神活動をおこなう場である。特定の目的のために教職員ならびに学生を管理し、特定の方向へ向けるべく力を加えることは、大学本来の知的創造力を失わせ、ひいては大学が本来持っているはずの社会的役割を放棄し、その負託に答えられなくなることを意味する。その意味で、この「学生による授業評価アンケート」結果のデータは特定の意図を持って処理され、一律の基準の下に評価されることはない。それゆえに、集計データの統計的処理はアンケート対象になった個々の教員に任されることになった。それが所見票に表現されるのである。

このアンケートは大学としての教育力向上を目的としておこなわれるので、学生の自覚を促すことも期待されている。そのことは、一朝一夕に実現させることは難しいかもしれないが、学生たちの評価アンケート結果に対して、各教員がそれぞれの学問的見識を持って所見票で答え、実際の授業に反映する努力が積み重ねられることによって、徐々に現実化してゆくであろう。現在の大学では学生の自主的活動が必ずしも本来期待されているほど十分でなく、大学生の学校生徒化が進んでいると一般に言われている。その中で、学生の主体的参加が教員との関係を変えるきっかけになることを直接に経験することで、学生の姿勢が変化することを期待したい。

さらに、アンケート結果、所見票が公表されることにより、教職員相互間、あるいは教員と学生との間で切磋琢磨する風潮が広まれば、大学全体として、個々の学問研究と教育の活動に根ざした種々の改善が期待される。カリキュラムはもちろん、組織の運営体制や施設なども、このアンケートを手がかりにその評価の俎上に載せられることになってゆくであろう。

この「学生による授業評価アンケート」が、大学の知的エネルギーを構成している教職員相互の関係や教職員と学生との関係、あるいは学生相互の関係などを揺り動かし、多様な観点から相互に力を及ぼしあう結果になることを、我々は心から期待したい。そして、そのことがやや動脈硬化が進行してきた大学という組織にも再び熱い血を通わせ、教職員も学生も本学に集うことこそがその熱い血の拍動を生み、学問に触れることが楽しくて仕方がないという状況を生み出すことを心から願う。

## 1-2 「報告書」作成の基本的な考え方

「学生による授業評価アンケート」は調査である限りその結果がまとめられなければならない。我々はそれを報告書という形で世に問う。この報告書はアンケート対象になった個々の授業が1-1で述べられた目的に沿って学生によって評価された結果を総体として、学部・学科ごとに、そして大学全体として、その教育力を評価し、成果の上がっていることに関してはその成果の意味を明らかにし、さらにその成功を維持するための方策を考え、改善が必要なことに関しては、その原因を究明し、その克服のための方法を構築する。そして次のアンケートにその改善努力の成果を問う。

この報告書の構成は以下のとおりになっている。

まず、(1)すでに述べたとおりこのアンケートの目的を明らかにする。その次に、(2)その目的に沿ったアンケート実施の概要を報告する。その上で、(3)統計処理上の技術的方針について、我々の考え方を明示し、データの性格を規定し、将来の調査をも視野に入れた分析方針を提示する。そして、(4)全学的な総評をおこなう。最後に(5)学部やその他の教育組織ごとの総評をまとめる。以上である。

この報告書はあくまで1-1のアンケートの目的に謳われている⑥学部・学科としてのカリキュラムの有効性を測定するための資料、および⑦大学としての教育力向上に必要な方策を立てるための資料を提供するためにおこなわれる。したがって、この報告書には個々の授業やその担当者、あるいはある学科の科目として特定できるような記述は記載されない。

それと同時に、この作業は全体としての③学生の学習姿勢を知るための資料、および④学生の授業への期待のありかを知る資料を得ることにつながる。授業に参加する学生たち自身の勉強に対する姿勢もアンケート項目に入っているため、それらについてはこの報告書の中で、各所で触れられることになるだろう。

これらの目的達成を検証することを狙い、我々は報告書を作成する。ちなみに目的の①と②は次に述べられる所見票に示されるだろう。⑤学生に授業履修への積極性と責任意識を喚起するという点については、この報告書や同時に作成される所見票(とその集成である所見集)に示されるのではなく、今後おこなわれる将来の「学生による授業評価アンケート」にその成果が示されることになるだろう。

## 1-3 「所見票」について

個々の科目のアンケート結果は、同じ科目の将来の開講の際に生かされるはずである。しかし、一方ではアンケートに答えた学生たちには、将来の授業では直接的にフィードバックすることはできない。そこで、個々の科目のアンケート結果についても、何らかの形で少なくとも当該学生たちには公開される必要がある、と我々委員会は考えた。その際には、単純にアンケート項目の集計結果だけを公開する方法と、それに対する教員の所見をも添えて公開する方法が考えられる。

我々は個々の科目担当者に、自分の科目についての自己点検・評価という意味でアンケート結果のデータを読んでもらい、「授業評価に対する担当教員の所見」、「自由記述欄に対する担当教員の所見」、「改善に向けた今後の方針」を書いてもらうこととした。この3つ

の教員記述にアンケートのすべての項目についてその結果を帯グラフに表したデータを付したものを「所見票」と称した (p.6 参照)。そして、この所見票を学生に公開することにした。

所見票を書くことはアンケート対象教員にとって負担にはなる。しかし、我々は敢えて対象となった教員全員に所見票作成を依頼した。なぜならば、自分の授業についての学生による評価が出たならば、それについての対処を明確に行い、アンケートに協力してくれた学生たちに直接回答することも、授業担当者である教員の義務だと、我々は考えたからである。所見票はそのすべてが 1 冊にまとめられて所見集とされ、学生に対して学内で公開されることになる。

所見票の狙いは以下の点にある。

- ① 教員がアンケート結果についてそれを直視し、自らの見解を発表する場を与える。
- ② 学内で公表されることによって、学生に直接回答する機会を与える。
- ③ アンケートに含まれる自由記述についてはデータ化できないので、教員の直接的コメントを通してその内容を明らかにすることを求める。
- ④ 改善に向けた明確な決意と工夫を書くことにより、次回アンケートとの比較を行い易くし、具体的授業改善の実現を可能にする。

以上である。

①については、教員側にも、もし学生からいわれのない不評や批判があった場合には、弁明する機会が欲しいとの声もあった。また、所見票を書けば、アンケート結果をつぶさに直視し、それに向き合って、自分に取り入れる契機とすることができる。さらに、データの多様な集計を当該教員に任せ、教員の必要に応じた分析を行い、納得の行く分析結果を出してもらうことにも意を注いだ。所見票はその結果を発表する場でもある。

②については、学生に対する直接回答であることを重視し、教員が自らの見解を自由に率直に表明しやすくするという趣旨で、公開は学内に限り、学生の便宜を考えて図書館に配置することにした。

③については、自由記述が単純にデータ化できないため、結果すべてを所見票に載せることはできない。また、記述内容によっては書き手が特定される場合もある。そこで、それを読んだ教員の責任でまとめてもらうことにして、教員所見にそのための欄を設けた。

④については、これを書くことでこのアンケートの目的で指摘された教員の自己研修を促すことになる。また、所見集が学内で公開されることから、学生以外にも同僚教員の目に触れる機会もあり、相互研修にもなることが期待される。

以上、所見票はこのようなことを期待して作られたのである。

(以上、2004 年度報告書より転載)

#### 1-4 2007 年度の実施科目の選定方針

授業評価アンケートの実施目的は変更していないが、2007 年度は、スタート時に掲げた目的のうち、「学部・学科としてカリキュラムの有効性を測定するための資料を得る」「大学として教育力向上に必要な方策を立てるための資料を得る」により比重を移して実施す

ることを決定した。具体的には、実施科目の選定方針をこれまでの「1 教員 1 科目」に限定せず、各学部が必要性に応じて選定することを可能とした。選定の例としては、授業の目標・内容が一定程度共通で複数コマ展開している科目（「基礎演習」や「入門演習」など）や必修・選択など科目の属性による選定、大人数科目などが挙げられる。詳細については、「2-3 実施科目の選定方針」（p. 11）を参照されたい。



# 2007年度前期立教大学授業評価アンケート 所見入力票

科目コード AA099	開講曜日 金	担当者 立教 花子	履修者数 71
科目名	開講時間 2-2	教室 9000	回答数 35

授業評価に対する担当教員の所見

## 単純集計結果 (5:大いにそう思う, 4:そう思う, 3:どちらともいえない, 2:あまりそう思わない, 1:そう思わない, 無回答)

5	4	3	2	1	無回答	エラー
I. この授業へのあなたの取り組み方について、以下の項目にどの程度当てはまりますか。						
1) 授業全体を通じての出発率 (5:90%以上, 4:70~89%, 3:50~69%, 2:30~49%, 1:30%未満)						
2) この授業に積極的に参加した						
3) この授業の履修にあたって十分な準備ができていた						
4) 授業をきっかけとして発展的な勉強をした						
5) シラバス (履修事項の講義内容) は受講に役立った						
6) 授業の予習復習等に毎週当てた時間 (5:3時間以上, 4:2~3時間, 3:1~2時間, 2:1時間未満, 1:0時間)						

## II. この授業の進め方は、以下の項目にどの程度当てはまりますか。

1) 聞きやすい話し方だった	
2) 各回の授業内容の量が適切だった	
3) 各回の授業のねらいは明確だった	
4) 各回の授業内容は明確だった	
5) 十分な静肅性が保たれた	
6) 教科書・授業レジュメプリントや参考文献が効果的だった	
7) 板書のしかたが適切だった	
8) 映像授業教材 (ビデオ、OHP、パワーポイントなど) の使用が効果的だった	
9) 教員は授業の進捗を周到に行っていた	

## III. この授業からあなたには次のものを得ることができたと思いますか。

1) 自分にとって新しい考え方・発想	
2) 授業で扱った分野に関する基本的な専門知識	
3) 自分で調べ、考える姿勢	
4) 授業で扱った内容が持つ、現代に通じる普遍的な意味	

## IV. 総合的にみて、この授業は以下の項目にどの程度当てはまりますか。

1) わかりやすい授業だった	
2) 授業全体の目標が明確だった	
3) 学問的興味をかきたてられた	
4) この授業を受けて満足した	

## V. 学部等による質問 (文学部)

1) この授業の効果が大ききは適切だった	
2) この授業の受講率は適切だった	

記述による評価に対する担当教員の所見

改善に向けた今後の方針

## 2. 授業評価アンケートの実施概要

本報告書において、「学部等」とは、各学部、全学共通カリキュラムおよび学校・社会教育講座のことである。また、学部表示は科目開設学部を示しており、回答者（学生）の所属ではない。

### 2-1 実施方式

無記名式の質問紙によるアンケート方式にて実施した。また、アンケートの実施は授業時間内（授業開始から30分間、もしくは授業終了前の30分間）において行うこととした。

### 2-2 設問項目

アンケートの質問紙は、5段階による評価方式の設問を23設問、記述による評価欄を2箇所の構成とした（pp. 8-9 参照）。設問の中には、必ずしも全科目には該当しないと思われるような設問もある。例えば、「板書のしかたが適切だった」との設問は、板書を使用しない授業を行う教員には必要がない、といったケースである。実施委員会としては、各設問項目の数値は、科目の特徴に照らして各科目担当者の裁量により解釈されるものとしている。

また、学部等によって独自の設問が設定できるよう、1学部あたり最大で7設問を設定できるようにした。2007年度は、文学部（2設問）、経済学部（6設問）、理学部（1設問）、観光学部（7設問）、全学共通カリキュラム（2設問）が学部設問項目を設定した（p. 10 参照）。





## 2007 年度立教大学授業評価アンケート

### V. 学部等による設問

以下の項目に対して、あなたにとって 5 段階のどの評価であるか、別紙『2007 年度立教大学授業評価アンケート』裏面の「V. 学部等による設問」〔評価欄〕にマークしてください。

- 5：とてもそう思う 4：そう思う 3：どちらともいえない 2：あまりそう思わない  
1：そう思わない

#### (文学部)

- 1) この授業の教室の大きさは適切だった。
- 2) この授業の受講者数は適切だった。

#### (経済学部)

##### 基礎演習

- 1) みんなの前で自分の意見を言えるようになった
- 2) 経済に関する文献を読めるようになった
- 3) レジюмеやレポートを作成できるようになった

情報処理系科目 情報処理入門、情報処理入門2、経済情報処理A、B、政策情報処理A、B、  
経営情報処理A、B、財務情報処理A、B

- 4) ワードプロソフト (Word) を使いこなせるようになった
- 5) 表計算ソフト (Excel) を使いこなせるようになった
- 6) WEB 上からデータをダウンロードし、分析できるようになった

#### (理学部)

- 1) 教員は質問・疑問に対し積極的に答えてくれた。

#### (観光学部)

- 1) わたしの成績は、観光学部の中で良いほうだ。(観光学部以外の学生は答えないこと)
- 2) わたしは、授業中に、飲食や私語をすることを好ましくないと思う。
- 3) わたしは、新座キャンパスで学ぶことに満足している。
- 4) わたしは、旅行することが好きだ。
- 5) わたしは、この授業を通じて、現代社会における観光の重要性を認識した。
- 6) わたしは、この授業を通じて、観光関連の仕事に興味をおぼえた。
- 7) わたしは、この授業を通じて、観光を学ぶことにより興味がわいた。

#### (全学共通カリキュラム)

- 1) この授業の教室の大きさは適切だった。
- 2) この授業の受講者数は適切だった。

## 2-3 実施科目の選定方針

「学生による授業評価アンケート」は、2004年度に開始して以降3年間、講義科目を対象に1教員1科目の原則で実施してきた。4年目となる2007年度は、「学部・学科としてカリキュラムの有効性を測定するための資料を得る」「大学として教育力向上に必要な方策を立てるための資料を得る」により比重を移し、これまでの1教員に科目に限定せず、各学部・学科等の必要性に応じて選定を行った。

実施科目は、学部科目（全学共通カリキュラムおよび学校・社会教育講座を含む）を対象とし、専門演習、実験、集中や実技を伴う科目、全学共通カリキュラム言語科目は対象外とした。

### <科目選定方針一覧>

学部等	科目選定方針
文 学 部	(1) 各学科・専修の導入教育（初年次教育）科目 ① 1年次必修科目 ② 1年次で履修可能な科目 ③ 2年次必修科目 ④ 2年次で自動登録となる科目 (2) 文学部基幹科目 (3) 各学科・専修で必要と認める科目
経 済 学 部	(1) 「講義科目1教員1科目」の調査は実施しない。また、これまで実施してきた科目は原則として実施しない (2) 共通シラバスを用い、授業の目的及び内容にある程度の共通性があり、複数コマ開講されている科目及び積み上げ方式の1年目科目（それに直接接続する科目を含める場合もある）についてアンケートを実施する
理 学 部	(1) 数学科・化学科・生命理学科は、各教員1科目実施 (2) 物理学科は、全科目実施 (3) 生命理学科は、これまで未対応の必修科目でも実施をしたい
社 会 学 部	(1) 「講義科目1教員1科目」を原則とする (2) 必修科目、選択必修科目は原則として全て実施する (3) 産業関係学科の科目は実施しない (4) 兼任講師が担当する履修者数が少ない（履修者数40名未満）選択科目は除外する
法 学 部	「講義科目1教員1科目」
経 営 学 部	(1) 講義系（リテラシー関連の実習含む）全科目で実施する (2) 基礎ゼミで実施する
観 光 学 部	(1) 学部で設置意図にそって分析し易いように科目を選ぶ (2) 概ねこれまでの実施科目数を目度に、共通科目（必修科目）、共通基幹科目（選択必修科目）、学科基幹科目（必修科目）の全科目と学科基幹科目（選択必修科目）のうち、1・2がある科目については、1だけを対象とする (3) 関連基礎科目や語学系科目、専門演習については対象外とする
コミュニティ福祉学部	(1) 「1教員1科目の原則」を基本とする (2) 下記の科目を追加する ① 学部専門の入門的講義科目、必修講義科目（オムニバス科目を除く） ② 福祉士・社会調査士・障害者スポーツ指導員の資格科目を追加する（「社会福祉士」「精神保健福祉士」「社会調査士」「初級スポーツ指導員」資格科目） (3) 演習・実習系の科目は対象としないが、1年次の基礎演習では実施する
現 代 心 理 学 部	(1) 「講義科目1教員1科目」 (2) 共通科目で複数開講されている科目のうち、専門演習以外のものは選定対象とする (3) 初年時教育として位置づけられる科目（概説等系科目）は、選定対象とする
全学共通カリキュラム	100名以上の科目を対象として、学期あたり1教員1科目の実施
学校・社会教育講座	「講義科目1教員1科目」

## 2-4 実施科目数

実施予定科目数、実施科目数、所見票の提出数に関して、科目担当者を専任と兼任に分けて下の表にまとめた。全学の実施率は 99.3% (1,109/1,117)、所見票提出率は 78.4% (870/1,109) であった。

通年科目で前期と後期で異なる科目担当者がそれぞれアンケートを実施した場合は、前期1科目および後期1科目としてカウントした。

科目開設学部等	実施予定 科目数	担当者内訳		実 施 科目数	担当者内訳		所見票 提出数	担当者内訳	
		専 任	兼 任		専 任	兼 任		専 任	兼 任
文 学 部	174	90	84	170	86	84	132	61	71
経 済 学 部	90	40	50	90	40	50	84	40	44
理 学 部	104	63	41	102	61	41	90	55	35
社 会 学 部	109	40	69	109	40	69	86	32	54
法 学 部	66	36	30	66	36	30	50	31	19
経 営 学 部	108	66	42	107	65	42	75	40	35
観 光 学 部	70	37	33	70	37	33	55	25	30
コミュニティ福祉学部	118	44	74	118	44	74	88	34	60
現代心理学部	40	37	3	40	37	3	19	17	2
全学共通カリキュラム	179	57	122	178	56	122	135	40	95
学校・社会教育講座	59	5	54	59	5	54	56	5	51
合 計	1,117	515	602	1,109	507	602	870	380	496

注) 所見票提出数は、2008年6月30日現在

注) 助教C(旧制度助手からの移行)は専任としてカウント

## 2-5 実施期間

実施は、①授業が進行した後半の時期が好ましい ②試験の時期は避けることから、下記の期間とした。下記期間内に実施できない場合は翌週に実施した。

前期 : 2007年6月22日(金)から6月28日(木)

後期 : 2007年12月3日(月)から12月8日(土)

## 2-6 回答者数

アンケート実施科目の延べ回答者数を、科目の開設学部等別に下表にまとめた。参考のために、履修者数も表に載せた。

科目開設学部等	前 期		後 期		合 計	
	履修者数	回答者数	履修者数	回答者数	履修者数	回答者数
文 学 部	7,740	5,272	3,938	2,554	11,678	7,826
経 済 学 部	1,834	1,526	3,441	1,919	5,275	3,445
理 学 部	3,676	2,250	3,149	1,501	6,825	3,751
社 会 学 部	6,047	3,563	7,923	4,289	13,970	7,852
法 学 部	8,506	2,946	10,666	3,537	19,172	6,483
経 営 学 部	7,178	4,105	7,588	3,341	14,766	7,446
観 光 学 部	5,373	3,091	3,612	2,214	8,985	5,305
コミュニティ福祉学部	6,997	4,532	4,884	2,686	11,881	7,218
現代心理学部	2,216	1,532	1,929	1,313	4,145	2,845
全学共通カリキュラム	23,755	12,656	19,458	9,278	43,213	21,934
学校・社会教育講座	3,207	2,388	584	427	3,791	2,815
合 計	76,529	43,861	67,172	33,059	143,701	76,920

## 2-7 「所見集」の公開

所見票（科目別の集計結果および科目担当者による所見）は、「所見集」としてまとめ、下記の図書館において、学内者の閲覧に供している。

池袋本館および新座図書館：全科目

人文科学系図書館：文学部、全学共通カリキュラム

社会科学系図書館：経済・社会・法・経営学部、全学共通カリキュラム

自然科学系図書館：理学部、全学共通カリキュラム





## 3. 科目担当者・学部等への集計結果のフィードバック

### 3-1 科目担当者

アンケート実施後1~2ヶ月後に、下記の集計結果を科目の担当者へ送付し、所見の執筆を依頼した。

- ① 集計結果票 (p. 16 参照)
- ② 「記述による評価」一覧票
- ③ アンケート元データ

### 3-2 学部等

#### 1) 集計の方針

本年度の授業評価アンケートは、昨年度と対象科目および科目選定の基準が異なり、また、学部等によっても科目選定方針が異なることから、以下の方針で集計を行った。

- ① 集計・分析は、学部等別に行い、全学での集計や学部等間の比較、昨年度との比較は行わない。ただし、昨年度と選定方針が同じ学部等（理学部、法学部、学校・社会教育講座）は、学部等平均値について年度間比較を行う。
- ② 学部等が独自に設定した基準でアンケート実施科目をグループ化し、科目間の比較や全体傾向を把握するグループ集計を新規に実施する。グループ集計の実施の有無は学部の判断に委ねる。

#### 2) 科目開設学部等別の集計

##### ① 回答者に関する集計

アンケート回答者を学部等別、学年別に集計した。また、アンケート実施科目の延べ履修者数と延べ回答者数を集計し、回答率を算出した。

##### ② 設問項目別平均値

学部等、学科等、授業規模（回答者数）、学年別に設問項目別平均値を算出した。学部等平均値については、5段階評価の回答割合を帯グラフで示した。また、実施科目の選定方針が昨年度と同じ学部等は、学部等平均値の年度間比較を行った。（学部等平均値は、資料編 pp. 56-66 参照）

##### ③ 設問項目間の相関係数

学部等別に設問項目間の相関係数を算出し、IV総合評価、特にIV4「この授業を受けて満足した」について、他の設問項目との関連をみた。

#### 3) グループ集計

学部等が独自に設定した基準によりアンケート実施科目をグループ化し、設問ごとに5段階評価の回答割合を帯グラフで示した。また、設問項目別平均値をレーダーチャートと一覧表で示した（pp. 17-18 参照）。

## 2007年度前期立教大学授業評価アンケート 集計結果票

科目コード AA999	開講曜日 金	担当 2-2	担当者 教室	立教 花子	履修者数 71
科目名	開講時間	2-2	教室	9000	回答数 35

**単純集計結果** (5:大いにそう思う, 4:そう思う, 3:どちらともいえない, 2:あまりそう思わない, 1:そう思わない, 無回答)

5	4	3	2	1	無回答	エラー
回答者数、( )内はパーセント						

平均

1から5の数字の平均

### I. この授業へのあなたの取り組み方について、以下の項目にどの程度あてはまりますか。

1) 授業全体を通じての出席率 (5:90%以上 4:70%~89% 3:50%~69% 2:30%~49% 1:30%未満)	24 (69%)	9 (26%)	2 (6%)	0 (0%)	0 (0%)	0	0	4.63
2) この授業に積極的に参加した	9 (27%)	12 (36%)	10 (30%)	2 (6%)	0 (0%)	1	1	3.85
3) この授業の履修にあたって十分な準備ができていた	3 (9%)	7 (21%)	9 (26%)	11 (32%)	4 (12%)	0	1	2.82
4) 授業をきっかけにして発展的な勉強をした	3 (9%)	11 (31%)	9 (26%)	6 (17%)	6 (17%)	0	0	2.97
5) シラバス (履修要項の講義内容) は受講に役立った	12 (35%)	14 (41%)	6 (18%)	1 (3%)	1 (3%)	1	0	4.03
6) 授業の予習復習等に毎週当てた時間 (5:3時間以上 4:2~3時間 3:1~2時間 2:1時間未満 1:0時間)	0 (0%)	1 (3%)	0 (0%)	11 (32%)	22 (65%)	1	0	1.41

### II. この授業の進め方は、以下の項目にどの程度あてはまりますか。

1) 聞きやすい話し方だった	26 (74%)	6 (17%)	1 (3%)	2 (6%)	0 (0%)	0	0	4.60
2) 各回の授業内容の量が適切だった	20 (57%)	12 (34%)	2 (6%)	1 (3%)	0 (0%)	0	0	4.46
3) 各回の授業のねらいは明確だった	18 (51%)	16 (46%)	1 (3%)	0 (0%)	0 (0%)	0	0	4.49
4) 各回の授業内容は明確だった	20 (57%)	15 (43%)	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)	0	0	4.57
5) 十分な静肅性が保たれた	28 (80%)	6 (17%)	1 (3%)	0 (0%)	0 (0%)	0	0	4.77
6) 教科書・授業レジュメプリントや参考文献が効果的だった	21 (60%)	10 (29%)	3 (9%)	1 (3%)	0 (0%)	0	0	4.46
7) 板書のしかたが適切だった	4 (12%)	6 (18%)	22 (65%)	0 (0%)	2 (6%)	1	0	3.29
8) 映像視覚教材 (ビデオ、OHP、パワーポイントなど) の使用が効果的だった	28 (80%)	6 (17%)	1 (3%)	0 (0%)	0 (0%)	0	0	4.77
9) 教員は授業の準備を周到に行っていた	29 (83%)	6 (17%)	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)	0	0	4.83

### III. この授業からあなたは次のものを得ることができたと思いますか。

1) 自分にとって新しい考え方・発想	16 (47%)	11 (32%)	6 (18%)	1 (3%)	0 (0%)	1	0	4.24
2) 授業で扱った分野に関する基本的な専門知識	12 (35%)	15 (44%)	7 (21%)	0 (0%)	0 (0%)	1	0	4.15
3) 自分で調べ、考える姿勢	2 (6%)	13 (38%)	12 (35%)	6 (18%)	1 (3%)	1	0	3.26
4) 授業で扱った内容が持つ、現代に通じる普遍的な意味	5 (15%)	13 (38%)	14 (41%)	1 (3%)	1 (3%)	1	0	3.59

### IV. 総合的にみて、この授業は以下の項目にどの程度あてはまりますか。

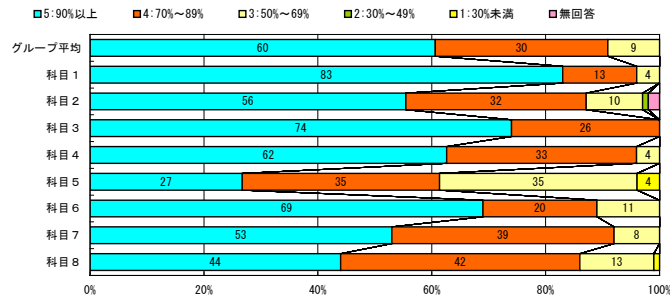
1) わかりやすい授業だった	22 (63%)	11 (31%)	1 (3%)	1 (3%)	0 (0%)	0	0	4.54
2) 授業全体の目標が明確だった	17 (50%)	15 (44%)	2 (6%)	0 (0%)	0 (0%)	1	0	4.44
3) 学問的興味をかきたてられた	17 (50%)	11 (32%)	6 (18%)	0 (0%)	0 (0%)	1	0	4.32
4) この授業を受けて満足した	18 (51%)	14 (40%)	2 (6%)	1 (3%)	0 (0%)	0	0	4.40

### V. 学部等による設問 (文学部)

1) この授業の教室の大きさは適切だった	23 (68%)	6 (18%)	4 (12%)	1 (3%)	0 (0%)	1	0	4.50
2) この授業の受講者数は適切だった	21 (62%)	10 (29%)	3 (9%)	0 (0%)	0 (0%)	1	0	4.53

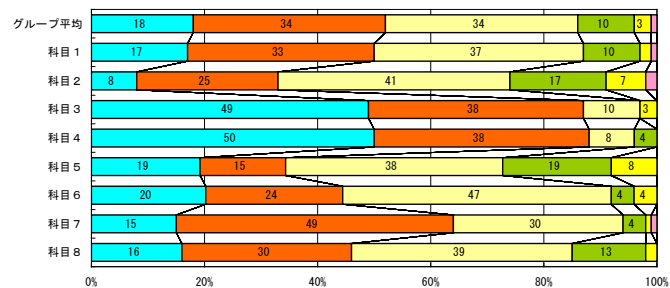
設問別帯グラフ ( 5:大いにそう思う 4:そう思う 3:どちらともいえない 2:あまりそう思わない 1:そう思わない 無回答 )

I-1 授業全体を通じての出席率



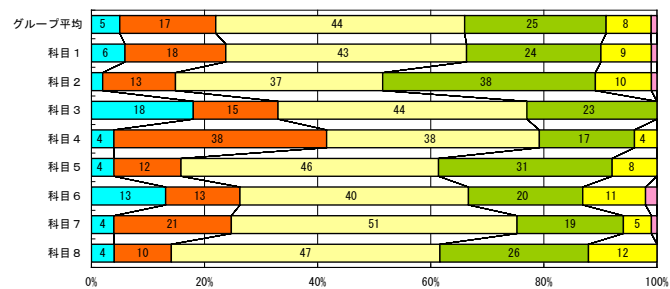
	回答者数	平均
グループ平均	621	4.5
科目1	127	4.8
科目2	104	4.5
科目3	39	4.7
科目4	24	4.6
科目5	26	3.8
科目6	45	4.6
科目7	150	4.5
科目8	106	4.3

I-2 この授業に積極的に参加した



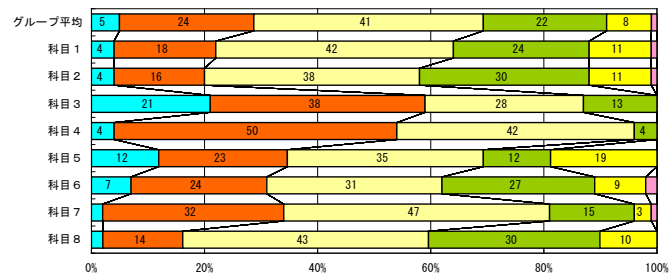
	回答者数	平均
グループ平均	621	3.6
科目1	127	3.5
科目2	104	3.1
科目3	39	4.3
科目4	24	4.3
科目5	26	3.2
科目6	45	3.5
科目7	150	3.8
科目8	106	3.5

I-3 この授業の履修にあたって十分な準備ができていた



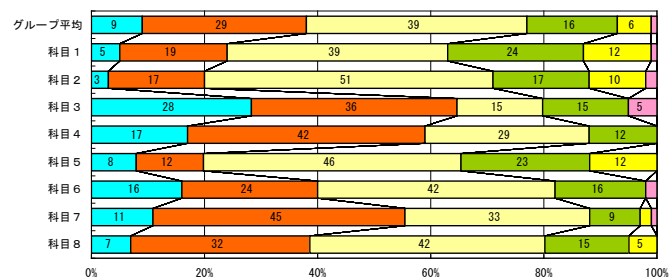
	回答者数	平均
グループ平均	621	2.9
科目1	127	2.9
科目2	104	2.6
科目3	39	3.3
科目4	24	3.2
科目5	26	2.7
科目6	45	3.0
科目7	150	3.0
科目8	106	2.7

I-4 授業をきっかけにして発展的な勉強をした



	回答者数	平均
グループ平均	621	2.9
科目1	127	2.8
科目2	104	2.7
科目3	39	3.7
科目4	24	3.5
科目5	26	3.0
科目6	45	2.9
科目7	150	3.1
科目8	106	2.7

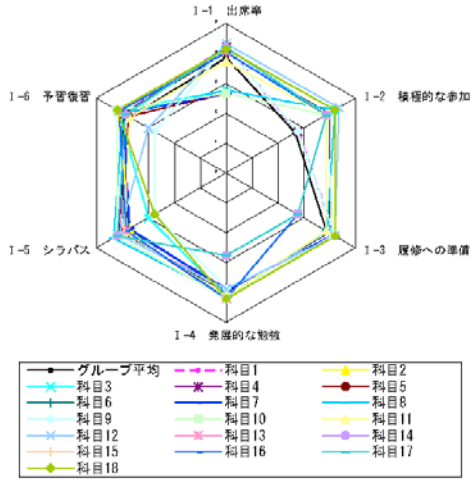
I-5 シラバス(履修要項の講義内容)は受講に役立った



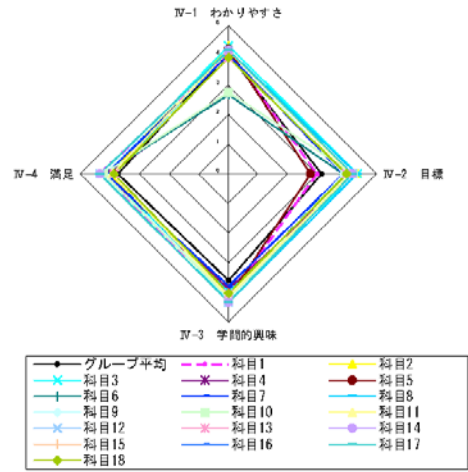
	回答者数	平均
グループ平均	621	3.2
科目1	127	2.8
科目2	104	2.9
科目3	39	3.8
科目4	24	3.6
科目5	26	2.8
科目6	45	3.4
科目7	150	3.5
科目8	106	3.2

## 平均値のレーダーチャート

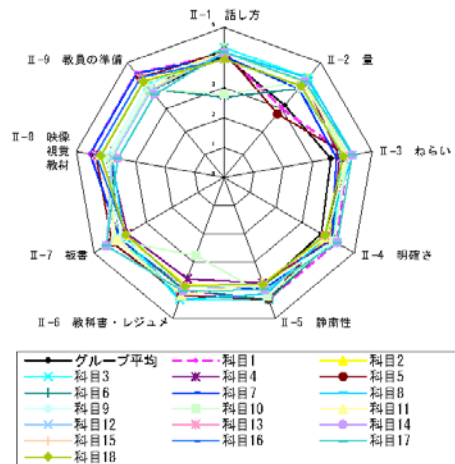
I. この授業へのあなたの取り組み方について、以下の項目にどの程度当てはまりますか。



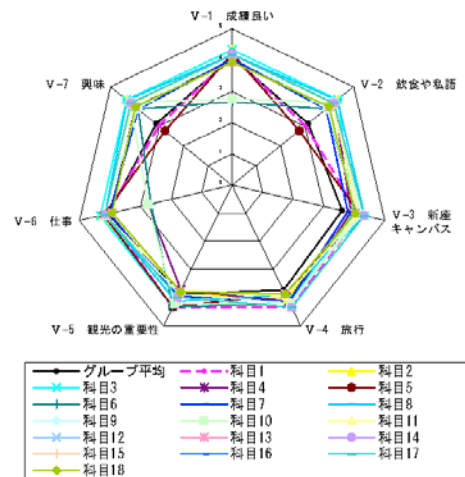
IV. 総合的にみて、この授業は以下の項目にどの程度当てはまりますか。



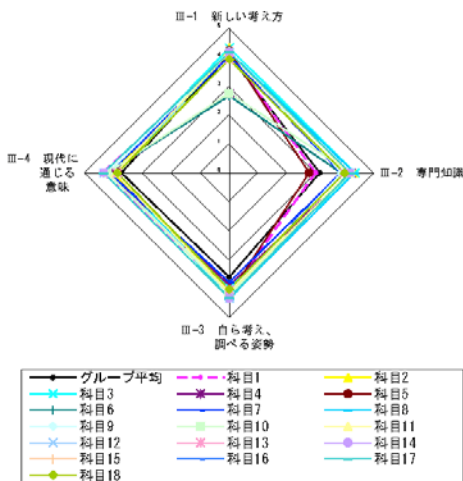
II. この授業の進め方は、以下の項目にどの程度当てはまりますか。



V. 学部等による疑問(観光)



III. この授業からあなたは次のものを得ることができたと思いますか。



### 5段階評価

- 5: 大いにそう思う
- 4: そう思う
- 3: どちらともいえない
- 2: あまりそう思わない
- 1: そう思わない

### <I-1>

- 5: 90%以上
- 4: 70から89%
- 3: 50~69%
- 2: 30~29%
- 1: 30%未満

### <I-6>

- 5: 3時間以上
- 4: 2~3時間
- 3: 1~2時間
- 2: 1時間未満
- 1: 0時間

## 4. 学部等総評

学部等総評は、各科目の集計結果と各教員の執筆した所見票をもとに、各学部等が執筆した。

学部等総評の構成は、下記の 2 つのうちのいずれかを原型とするか、もしくは両者を適宜組み合わせたものとした。

<2007 年度に科目選定方針を変更せず、グループ集計を実施しなかった学部等>

1. 科目選定方針とねらい
2. 集計データにみられる結果のまとめ
3. 担当教員の所見票に対するまとめ（「授業評価に対する担当教員の所見」、「自由既述欄に対する担当教員の所見」、「改善に向けた今後の方針」のまとめ）
4. 学生からの意見（記述による評価）の集約（「肯定的評価として多い意見」、「否定的評価として多い意見」の集約）
5. 今後の改善に向けて

<グループ集計を実施した学部等>

1. 科目選定方針とねらい
2. 集計データにみられる結果のまとめ
3. グループ集計にみられる結果（「グループ集計の分類」、「学科や履修者数、同一名称科目等、グループ集計の分類により項目立て」）
4. 今後の改善に向けて

## 4-1 文学部

### 1. 集計データからみられる結果のまとめ

今年度から実施科目の選定方針を変更し、基礎演習などの少人数科目の結果などが含まれていて、一概に過去の年度と比較は出来ないが、回答率などは約10パーセント近く上昇しており、授業評価アンケートが定着してきたことを示すものであろう。又、選定方針などの異なりがあり、これも一概に言えないが、回答者数は、1年生が半数以上を占めており、4年生は約6パーセントである。この結果は選定方針を変更した結果とばかりとは言えないであろう。又就職活動などによる出席率の減少や他諸般の事情があると思うが、経験を踏まえた上級生のアンケート回答率を上げることが今後の大きな課題であろう。又、文学部では卒業時に卒業論文・卒業研究といった課題が課されており（自由選択の学科も多い）、それらを行った学生の満足度・達成感も集計し、アンケート結果を見る学生が、今後の授業への積極的取り組みを助長するものであって欲しい。

おおむね授業科目への評価はよかったと思われるが、基幹科目・共通科目などの評価が低いのが気になる。基幹科目が学生にとってどのような効果を上げることになるのか検討課題になろう。

### 2. 担当教員からの所見票のまとめ

#### 2-1 授業評価に対する担当教員の所見まとめ

教員個人では解決出来ない問題点や本年度も継続した、カリキュラム移行期の問題があり、教員の側で苦慮した側面もあった。カリキュラム移行期の問題は、今後解決の方向に向かうと考えられるが、受講人数の等で苦慮する教員の回答や学生の学習意欲をいかに助長するかといった点へ苦慮する回答もみられた。これらの教員の回答を今後どう生かすかが重要な課題である。

#### 2-2 記述による評価欄に対する担当教員のまとめ

記述による部分をできるだけ減らし、アンケートで判断出来るような質問を今以上に増やしてはどうか。記述から評価をくみ取ることは恣意的表現が多く困難さを感じた。

#### 2-3 改善に向けた今後の方針

板書などの技術的な改善に対する努力に向けて積極的な記述がみられた一方で、学生への安易な迎合的授業計画に対する懸念が表明されている。アンケートによってもたらされるマイナスの側面に対しても今後配慮が必要であろう。（もとより、アンケートのプラス面を前提にしながら）

### 3. 学生からの意見（記述による評価）の集約

#### 3-1 肯定的評価として多い意見

- 1) 視聴覚資料の使用に対する評価が高い。
- 2) 一方的講義形式ではなく、授業内への学生の参加（討論など）型への評価が高い。

### 3-2 否定的評価として多い意見の集約

- 1) 板書などの技術的指摘
- 2) 一部に静粛が保たれていないという指摘
- 3) 講義の難易度やシラバスの活用がない点

#### 4. 今後の授業改善に向けた課題の提示

文学部の授業は、基礎的な習練科目と最新の研究成果を問いかける科目とでは、その理解度を測る基準は異なっている。前者においては、アンケートなどの結果を十分に咀嚼する必要がある。後者においては、受講生の理解度以上に教員自身がいかに研究課題に真摯であったかの自己評価を要求されるであろう。「学生による授業評価アンケート」もこの点を考慮する必要がある。もとより、最新の研究成果の披瀝も自己撞着に陥るようなものであってはならない、いかに他者（学生）に理解出来るように講義するかが課題である。きわめて困難な課題であるが、今後、教員の自立と自由を最優先しながら、教員が相互に連携を取り研究会などで検討すべきである。文学部では、基礎科目等のグループ別アンケートを実施したが、基礎となるべき科目がいかなるシラバスで行うべきか、又基礎的の学問とは何かといった議論も煮詰まっていはいない。これも明確な又決定的な回答を得られるものではないが、議論の中で試行錯誤を繰り返すことが重要であろう。又、アンケート時期とその実施方法についても検討が加えられるべきであろう。現在は、授業内で行われているが、時期的にも授業後半の追い込みの時期に当たり授業そのものを阻害している側面も考えられる。そのような側面が本末転倒であることはいままでもない。授業外で配布する工夫も考えられていいのではないか。例えば2,3年次はオリエンテーション、4年次は卒業論ガイダンスなどといった場での方法も考えられる。少なくとも現在の方式を固定化する必要があるのかどうか、数年間の結果をどれほど重視するのかといったアンケートそれ自体の検討も課題になってくるのではないか。又、教員個人では解決出来ない諸問題もアンケートでは提言されている。大学当局の誠意ある対応も必要になるであろう。



## 4-2 経済学部

### 1. 科目選定方針

共通シラバスを用い、授業の目的及び内容にある程度の共通性があり、複数コマ開講されている科目及び積み上げ方式の1年生科目についてアンケートを実施した。なお、これまで実施してきた科目については、原則としてアンケート対象から除外した。本年度のアンケート実施科目は次のとおりである。

経済学、経済数学入門、簿記、統計学2、情報処理入門、情報処理入門2、経済情報処理A、経済情報処理B、基礎演習

上記科目のうち、基礎演習及び情報処理系科目については、グループ集計を行うと共に学部等による設問を設けた。

### 2. 集計データにみられる結果のまとめ

大部分の調査項目において、平均値は3.5前後と高い数値を示した。4.0を上回る項目と3.0を下回る項目が各々2例あり、それらはすべて「学生自身の授業への意識・姿勢」を示すアンケート群に集中していた。特に高い数値を示したのは「授業全体を通しての出席率」で4.69であった。1年生科目が多かったこと（学年別回答者の約8割を1年生が占める）、そして、実習系で積み上げ方式の科目がアンケート対象となったことが一因だと考えられる。

反対に、最も低い数値を示したのは「授業の予習復習等に当てた時間」で2.05であった。これについては、例えば「基礎演習」のように予習復習をあまり必要としない授業があることや既に情報処理のスキルを身につけており情報処理系科目について予習復習の必要がなかった学生も少なからずいることが考えられるので、必ずしも学生の準備不足や怠慢と結びつけることはできないであろう。

### 3. グループ集計にみられる結果

#### 3-1 グループ集計の分類

共通シラバスを用い複数コマ開講されている科目について、次の5グループに分類した。

グループ1：情報処理入門

グループ2：基礎演習（経済学科）

グループ3：基礎演習（経済政策学科）

グループ4：基礎演習（会計ファイナンス学科）

グループ5：情報処理入門2

#### 3-2 基礎演習

ほとんどの調査項目において平均値は3.5前後と高く、また、三学科のあいだに大きな相違はみられなかった。従来、講義内容は担当教員の裁量に委ねられる部分が大きく、テキストも統一されていなかったが、昨年度より共通テキストとして「基礎演習ハンドブック」を作成し、それを講義で用いることにより授業内容をある程度、統一できたことが一因だと考えられる。基礎演習を通じて、プレゼン能力が向上したことが窺える（学

部等による設問（V）より）。

なお、平均値が 4.0 を上回る項目と 3.0 を下回る項目数に注目すると、次のように学科により多少の違いがみられる。

（経済学科）

4.0 を上回る項目；1（「授業全体を通しての出席率」）

3.0 を下回る項目；3（「十分な静粛性」、「板書のしかた」、「映像視聴覚教材の使用」）

（経済政策学科）

4.0 を上回る項目；2（「授業全体を通しての出席率」、「授業への積極的参加」）

3.0 を下回る項目；1（「シラバスは受講の役立った」）

（会計ファイナンス学科）

4.0 を上回る項目；4（「授業全体を通しての出席率」、「授業への積極的参加」、「教員は授業の準備を周到に行っていた」、「レジュメやレポートを作成できるようになった」）

3.0 を下回る項目；0

### 3-3 情報処理系科目

情報処理入門は、同じ1年生科目である基礎演習と比べると全体的に平均値が低い印象を受ける（基礎演習同様、共通テキストを使用しており授業内容は基本的に統一されている）。4.0 を上回る項目が2つ（「授業を通じての出席率」、「授業への積極的参加」）、3.0 を下回る項目が5つあった（「授業をきっかけとして発展的な勉強をした」、「シラバスは受講に役立った」、「授業の予習復習等にあてた時間」、「十分な静粛性が保たれた」、「板書のしかたが適切だった」）。特に、「授業の予習復習等にあてた時間」は、1.7 と最も低い数値であった。情報処理入門2においても「授業の予習復習等にあてた時間」は1.8 と低いが、それ以外には3.0 を下回る項目はなく、また、平均値も全体的に情報処理入門に比べ高く、情報処理系科目の中でも違いがみられた。

身につけたスキルとしては、「Word」がもっとも高く 3.63 であり、次いで、「Excel」が 3.55、「データ分析」が 3.36 という数値であった。

## 4. 担当教員の所見票に対するまとめ

板書や静粛性、話し方等について改善を求める意見が多く、ほとんどの教員が学生からの指摘を真摯に捉え改善の努力を行う姿勢を示している。しかしながら、教員により受け止め方に違いがあることは否定できない。授業の難易度やパワーポイント・視聴覚教材に関する意見については、学生の記述による評価に両極の意見が混在しているケースもあり対応の困難さが窺える。

## 5. 今後の改善にむけて

複数コマ開講されている同一科目については、授業の進度、内容、試験の難易度等に関して担当教員間の調整が不可欠だといえる。定期的にミーティングを実施し、意見交換すべきであろう。また、基礎演習、情報処理入門が共通テキストを使用して成果を挙げていることを他の科目も参考にすべきである。

## 4-3 理学部

### 1. 科目選定方針とねらい

理学部では、学科により異なるルールで科目選定を行った。数学科・化学科・生命理学科では各教員につき1科目（主たる科目）を選んで授業評価アンケートを実施した。物理学科では全科目に対して実施した。ねらいは各学科の基本となる科目について授業評価アンケートを実施することで、理学部専門教育がどのように学生の視点から評価されているかを知り、分析・検討することで、各教員の授業の技量(教授力)の向上とともに、理学部としての総合的な教育力の増進を目指すものである。

### 2. 集計データからみられる結果のまとめ

二つを除くすべての調査項目において平均値は3.0以上であり、3.5前後が大半を占めている。3.0を下回った2項目は設問 I3、I6 であり授業への取り組み方に対する項目群の値が他の項目に比べて低い。昨年度と比較可能な項目では多くに改善が見られ、下回った項目はわずかに2項目であり、授業の進め方に関する項目群(Ⅲ)の改善が総合評価の項目群(Ⅳ)へも良い影響を及ぼしていると思われる。4学科間の差異はそれほど大きくはないが、数学・生命理学が高く、物理が若干低い。改善の余地は大いに残っているが、良い授業が行われ、学生も教員の努力を認めるという良い方向に向かいつつあると解釈できよう。しかし、それが学力に結びついているかが問題になっている。内容をやさしくしたら評価が上がったとの報告もあり、アンケートを短期的な授業技術の向上に留めず、教育の本来の目的である学力の向上にいかに関与させるかが課題となろう。

#### 2-1 学生の授業への姿勢 (I1~I6)

すべての項目で、昨年度よりわずかではあるが向上している。この傾向は一昨年より続いている。しかし、項目間を比べれば、予習・復習にあてた時間 (I6) の平均は2を僅かに上回る程度であり、出席率 (I1) の平均が4.67であることを見れば、授業には実に熱心に出席するものの予習・復習はまったく行わないという学生の状態があらわれてくる。理学部での授業の特性上(基礎・積み重ね)、予習・復習は非常に重要であり平均3を超える状況が望ましいが、それにはまだ遠い道のりといえる。だれもが解決策を模索し、挫折するということの繰り返しで、大きな課題として残っている。

#### 2-2 教員の授業方法 (II1~II9)

前年度より1項目を除いて僅少なながら向上が見られる。教員の授業の技量(教授力)に関する項目であるが、その平均は9項目中7項目で平均3.5を超えており、学生は教員の教授力を評価しているものと考えられる。減少した1項目は静粛性であるが、低年次の履修者数の多い科目で評価が低い点が見られる。平均3.5を下回る項目は、板書(II7)と視覚教材(II8)であるが、理学部の授業の特性上、視覚教材を利用する機会が少なく、板書が重要になっている点で、板書の技術について教員のさらなる努力を促したい。

### 2-3 授業内容（Ⅲ1～Ⅲ4）

今年度より設問内容が基礎的な科目にも対応できるように従来のものより変更された。すべての項目で平均は 3.5 前後となっている。内容を問う項目のため、学生の授業の取り組みとリンクしていると考えられる。十分な理解がないと自覚していながら自ら勉強できないため、授業の間の関連や目的が見抜けず、楽しみを感じられない状況が見える。さらに、基礎科目が多い理学部では、現代に通じる普遍的な意味という設問（Ⅲ4）はより難しい課題になっている。

### 2-4 総合的評価

全ての項目で昨年より向上が見られた。この傾向は1昨年より続いている。3項目で平均が 3.5 を超えており、学生の評価は概ね良好と判断される。

### 2-5 まとめ

多くの調査項目で平均値の増大が続いており、教員の不断の努力が反映されていると考える。授業内容、総合評価ではすべての項目において平均 3.5 前後にあり、学生は概ね良い評価を与えていると判断される。しかし、学生の授業への姿勢は向上傾向にあるとはいえ、低レベルに留まり、最も重要な学力に結びついているかが問題になっている。理学部の授業の特性を考慮した上で、アンケートの分析から有効な改善策を検討することが求められよう。

## 3. 担当教員からの所見票に対するまとめ

### 3-1 「授業評価に対する担当教員の所見」のまとめ

昨年度同様に、多くの教員は学生からの授業評価は概ね良好であったと判断している。授業評価の結果を真摯に受け止め、その分析を行い、今後の授業に役立てようという意見が多かった。集計データから見られる結果のまとめで書いたように、学生の授業への姿勢（特に予習・復習）に対する問題点の指摘が多く見られた。授業内容では、学生の理解のための技術面（板書・プリント・視覚教材等の有効的活用）に言及するものも多く、良い授業のために努力する姿勢が見られる。

### 3-2 「記述による評価に対する担当教員の所見」のまとめ

授業への工夫（視覚教材・レジュメプリントなどの副教材や CHORUS の利用）に対する高評価を認める意見が多くみられる。逆に、板書・静寂性に対する負の評価もあり、教員がしっかりと問題点を認識している。学生からの記述がないもしくはほとんどない授業も多く見られる。学生の「アンケート慣れ」という側面が考えられる。

### 3-3 「改善に向けた今後の方針」のまとめ

正の評価・負の評価を真摯に受け、さらなる改善を目指す意見が多く見られる。講義内容の見直し・レベルの調整から授業の工夫（視覚教材・プリント）まで幅広い領域での改善点が挙げられている。シラバスの有効利用に関する議論もある。一方では、教室

の大きさや受講生数等、教員だけでは解決できない問題もあり、円滑な教室スケジュール調整などの教務からの支援も求められる。

#### 4. 学生からの意見（記述による評価）の集約

##### 4-1 「肯定的評価として多い意見の集約」

所見を概観したところ、学生からの肯定的評価として、以下のような記述が多く見られた。(1) 丁寧な分かりやすい授業、(2) 読みやすい板書、(3) パワーポイントによる分かりやすい説明、(4) レジюмеプリントや補助資料による分かりやすい説明、(5) TA・SAの補助 (6) 効果的な小テストやリアクション・ペーパー。

##### 4-2 「否定的評価として多い意見の集約」

所見を概観したところ、学生からの否定的評価として、以下のような記述が多く見られた。(1) 板書に問題がある（早い、汚い、小さい）、(2) 声が小さい、静肅性に問題がある、(3) 授業内容の量が多い、内容が高度（学生のレベルに合わせて欲しい）、(4) 課題が難しい、量が多い、(5) 教室の大きさが適切でない。

#### 5. 今後の改善に向けて

良い授業のための教授力の向上への各教員の努力は絶え間なく行われている。個々の授業では、アンケートは学生からの教員に寄せられたメッセージと受け止め、その正・負の意見を真摯に受けその改善策が検討されている。所見からは、改善に有効ないくつかのポイント（教材、授業レベル設定等）が見出されており、今後の更なる改善が期待される。

しかし、授業の改善には、個々の教員の教授力の向上は重要なファクターではあるが、それだけでは限界があると考えられる。理学部での授業では基礎科目・積み上げる科目が多く存在し、学部・学科における有機的なカリキュラム編成が求められる。また、学生の学力や志向に関する教員間での情報共有も必要であろう。

授業の改善は、教育の本来の目的である学力（自ら学ぶ力）の向上により計られるものであろう。そのために、授業評価アンケートが利用されるものであり、長期に積み重ねられたデータの中から、いかに本質的な情報を抜き出してそれを反映させるかが課題になっている。

## 4-4 社会学部

### 1. 科目選定方針とねらい

2007年度の授業評価アンケート対象科目の選定に際し、社会学部では以下のような方針を立てた。

- ① 「講義科目1 教員1 科目」を原則とする。
- ② 必修・選択必修の講義科目は原則として全て実施する。
- ③ 産業関係学科の科目は実施しない。
- ④ 兼任講師が担当する履修者の少ない（40名未満）選択科目は除外する。

①は、現行の授業評価アンケートの主たる目的が「各教員がおこなう授業の仕方や内容の改善」にあるということに対応するもので、従来からの原則をふまえている。③は、2006年度からの学部再編のなかで学生募集を停止した学科の開設授業科目について、授業評価もおこなわないことにしたものである。また④は、小人数クラスで学生による授業評価をおこなうのは、匿名性保証の観点から望ましくないという観点によるものである。

一方、②は、各教員および個々の授業に対する個別評価の観点をいくらか越えて、学部および学科のカリキュラムを点検する観点を加味したものである。必修科目、選択必修科目は、学部教育カリキュラムの基盤をなす科目と位置づけられ、多くが初年次、2年次の導入期の履修とされている。したがって、これらの科目に対する学生の評価をみておくことは、今後の基礎教育の改善に向けた意義が認められるものと考えられる。

なお、必修科目には今回の評価対象とした講義科目の他に、「基礎演習」「専門演習1」等の演習科目や実習科目もあり、学部教育カリキュラム上でもたいへん重要な位置を占めている。しかし、現在のアンケートの設問や実施方法が必ずしも小人数の演習等の科目向きでないと判断し、今回の評価対象には含めていない。

### 2. 集計データにみられる結果のまとめ

今回の授業評価アンケートは、2006年までと一部設問が異なること、対象科目選定方針も若干異なることから、前年度までとの直接的な比較ができない。データも提供されていないが、たまたま昨年度の集計結果が手近にあったので参照し比較検討してみた。それによると、設問が異なる部分以外では、平均的な評価傾向（すなわち各設問の平均値、標準偏差等）はほとんど同じといってよさそうであった。2006年度における社会学部科目に対する学生評価の数値は、どの評価項目も全学平均に近いものだったことに鑑みれば、おそらく2007年度も「全学並み」と考えてよさそうである。

以下、「授業規模別」「学年別」「学科別」集計について概観する。

#### 授業規模別

授業に対する満足度、そして評価は、大規模授業であるほど低下するといわれている。実際、「Ⅱ-5 十分な静粛性が保たれた」の設問では、明らかに授業規模と評点との間にマイナスの相関関係がみられる。また、「Ⅱ-6 教科書・授業レジュメプリントや参考文献が効果的だった」の設問にも、やや同様の傾向がみられた。しかしそれ以外の大半の

設問に関しては、授業規模との明確な関連性を見出すことができない。したがって、静粛性の問題を除けば、社会学部の授業において規模は受講生の意識に大きな影響を与えていないようである。

### 学年別

授業出席率（Ⅰ-1）は学年が進むにつれて低下する。しかし、「Ⅱ この授業の進め方は…」 「Ⅲ この授業から得るものができたこと」 「Ⅳ 総合的にみて、この授業は…」 という大項目に含まれる各設問については、学年が進行するにつれて軒並み評価が上がる。2006 年度でも同様の傾向が観察され、アンケート実施委員会は「1 年生は必修科目が多く、学年が進むにつれて学生自身が希望する科目を取るようになるという解釈が可能」としており、全学的傾向であることを指摘していたが、同じ傾向は今回のアンケートでも確認されたということであろう。

### 学科別

興味深いことに、ほぼすべての項目において現代文化学科科目に対する評価平均値が高い傾向が見られる。理由は不明である。しかし 3 学科間の差異は軽微であり、また相対的にやや低い社会学科でも、例えば「Ⅳ 総合的にみて」の 4 項目の評価平均値はいずれも 5 段階中の 3（どちらともいえない）をかなり上回っており、評価としては悪くないと思われる。

## 3. グループ集計にみられる結果

### 3-1 グループ集計の分類

2007 年度のアンケート集計から、「グループ集計」が可能になった。グループ分けはそれぞれの学部委ねられたわけだが、上記の授業評価対象科目選定の方針にもとづき、次のようなグループ分けを事務局に依頼した。

- ・ 3 学科別に「必修科目・選択必修科目」「選択科目」をグルーピングする。
- ・ 前期・後期とも同じ分類で集計する。

結果として、前期で各学科 2 グループずつ計 6 グループ、後期も同様に 6 グループ、合計 12 のグループ別集計が出力されている。

### 3-2 各学科、必修科目／選択必修科目、選択科目による授業評価の傾向

以下では、アンケート設問の「Ⅳ」（総合的な評価）について、学科別、必修科目／選択必修科目別に分類した 12 グループ集計を概観していく。

### 社会学科

社会学科に限らない傾向であるが、「必修科目・選択必修科目」の評価は、「選択科目」の評価に比べて相対的に低くなる傾向がみられる。履修形態からみて当然のことといえる。いっぽう、「必修科目・選択必修科目」でも平均評点は 3.1～3.6 と、3 点以上を確保しており、全体的には悪くないといえるだろう。また、「選択科目」の平均評

点は 3.5～3.8 であり、受講生の総合的な評価は比較的よい。

なお、「必修科目・選択必修科目」について前期開講科目に比べ後期開講科目の評価が概ね 0.2 ポイント高い傾向が観察された。個々の出講科目の種類によるのか、学生側の受講タイミングによるのか（“受講慣れ” など）は不明である。

グループ別集計：各学科別／必修科目・選択必修科目／選択科目／前期・後期別 学生評価平均点

			わかりやすい	目標が明確	学問的興味	全体として満足
社会学科	必修科目・選択必修科目	前期	3.3	3.4	3.1	3.3
		後期	3.6	3.6	3.3	3.5
	選択科目	前期	3.8	3.8	3.6	3.7
		後期	3.7	3.7	3.5	3.6
現代文化学科	必修科目・選択必修科目	前期	3.5	3.7	3.3	3.5
		後期	3.5	3.7	3.5	3.5
	選択科目	前期	3.8	3.9	3.6	3.8
		後期	4.0	4.0	3.7	3.8
メディア社会学科	必修科目・選択必修科目	前期	3.4	3.5	3.3	3.4
		後期	3.5	3.6	3.5	3.5
	選択科目	前期	4.1	4.1	4.0	4.1
		後期	3.2	3.3	3.3	3.3

(高 5 ～ 1 低)

### 現代文化学科

社会学科同様、現代文化学科においても「必修科目・選択必修科目」の評価が「選択科目」の評価に比べて相対的に低くなる傾向がみられる。いっぽう、「必修科目・選択必修科目」でも平均評点は 3.3～3.7 と 3 点以上を確保しており、他の 2 学科に比べても相対的に高い。また、「選択科目」の平均評点は 3.6～4.0 であり、ここでも他の 2 学科より相対的に高い評価である。前期授業・後期授業による差異はほぼみられない。

### メディア社会学科

学科が新しくまだ 2 年次生までしか在籍していないこともあるのか、傾向が他の 2 学科とやや異なる。なかでも「選択科目」の評価において、前期の平均評点が各項目とも 4 点以上ととても高いのに対し、後期が 3.2～3.3 点と顕著に低く、「必修科目・選択必修科目」の平均評点をも下回っている。今後、学年進行にともない解消される特異な事象なのかそうでないかなど、推移を見守るべきであろう。

## 4. 今後の改善に向けて

2007 年度は、グループ集計として、上記のように学科別、「必修科目・選択必修科目」と「選択科目」という科目種別の集計をしてみた。授業評価アンケートの問題意識は、個々の科目単位の評価と授業改善という枠組みから少し組織的な方向へシフトしつつあり、社会学部としてもその方向でのデータ利用の可能性を一部試行したという段階といえるだろう。

しかし、学部としての教育目標やそれにもとづき展開されるカリキュラムに対する評価へと本格的に展開するためには、現行の授業評価アンケートの中の項目を点検するとどまらず、個別科目に対する授業評価アンケートという方式そのもののあり方、位置づけ等についての体系的な検討が不可欠である。FD について学部レベル、全学レベルでの総合的な検討を深めていくことを期待し、また取り組んでいきたい。



## 4-5 法学部

### 1. 科目選定方針とそのねらい

従来どおり専門講義課目を対象とした。大人数授業が多い法学部としては、これらの科目における教育を重視している。演習科目は少人数で、このような調査を行ないにくいという事情もある。

### 2. 集計データから見られる結果のまとめ

2005年度、2006年度と比べ、2007年度はほとんどの項目において平均値が上がっている。教員の努力の成果であるとともに、学生による授業アンケートの効果でもあると思われる。2006年度と比べ0.1ポイント以上、上昇した項目は、「この授業の履修にあたって十分な準備ができていた」（この項目は3年連続して0.1ポイント上昇している）、「聞きやすい話し方だった」、「各回の授業内容の量が適切だった」の3項目であった。

従来と同様に、他学部と比べて回答率が極端に低いことが目立っている。法学部のカリキュラムに必修科目がないことや、大教室での授業が多いために出席を取らない（出席率を評価にカウントすると、熱意の乏しい学生による私語が多くなるために出席を取らないというジレンマもある）、ミニテストも行わないなどの事情が、その背景にある。とはいえ、学部としてはこの状態が内包している問題をあらためて議論する必要があると思われる。

設問項目別の平均値を見ると、平均値3以下の項目としては、「この授業の履修にあたって十分な準備ができていた」、「授業をきっかけにして発展的な勉強をした」、「授業の予習復習等に毎週当てた時間」の3項目が該当する。いずれも学生の授業への取り組みに関するものであり、受動的な学習態度が見られると言えよう。その主な原因は大人数授業であることに求められるだろうが、教員としてはそれを前提にさらに工夫が必要であろう。

また、「この授業に積極的に参加した」、「この授業の履修にあたって十分な準備ができていた」、「授業をきっかけにして発展的な勉強をした」、「授業の静粛性が保たれた」、「授業の予習復習等に当てた時間」、「シラバスは受講に役立った」などの項目の平均値が、その多くは低いレベルながらも、過去3年間上昇していることが注目される。この点は、大人数授業が多いという条件にもかかわらず工夫を試みた教員、学生の努力が高く評価されるべきであろう。ただし、「授業の静粛性が保たれた」の項目については、上述のように出席率の低さから見れば当然とも言え、割り引いて考える必要がある。

「映像視覚教材の使用が効果的だった」の平均値は横ばい、あるいはやや上昇しているが学部と比べると決して高くはない。法学・政治学という教育領域の特性や大教室では後方の学生に見えにくいということもあるだろうが、工夫や教室の設備改善（スクリーンの複数設置など）が必要であろう。この項目の妥当性も議論されるべきである。

授業規模別平均値を見ると、100名を境に少人数授業における各項目の平均値がかなり高いことが分かる。100名程度までが効果的な授業規模であることを示唆しているように思われる。一方、学年が上がるごとに平均値が上昇しているという傾向がみられることは前年同様である。大学の授業に対して慣れてきたこともあろうが、知識が蓄積されて行くにつれて理解度も深まっている結果だと考えることもできよう。

### 3. 学生からの意見（記述による評価）の集約

評価は概ね肯定的であるが、同じ授業における同じ教育方法に対しても評価が分かれることが少なからずある。学生が肯定的に評価している点は、授業の進め方が理解しやすい、話が聞き取りやすい、レジュメなどが適切に配布され、板書が適切に行われ、私語を注意して静粛を保つことなどがポイントになっている。しかし、あまりに頻繁に私語を注意すると、かえって気が散るとの批判もある。

授業中に適宜質問を行ったり、リアクション・ペーパーを利用するなどして一方的な授業にならないように努力している授業の評価は高い。しかし、こうした授業も質問内容が難しかったり、質疑応答の間に私語が多くなったり、テンポが遅く感じられると評価は逆転する。パワーポイントの使用も評価が分かれている。分かりやすいという評価がある一方で、ノートが取りにくいので復習が難しいなどの声がある。授業後にパワーポイントの内容をウェブサイトに掲載するという工夫は肯定的に評価されている。一部には、授業前にサイバーラーニングでパワーポイントの内容をダウンロードできるようにしている例もあった。

低学年の学生に乱暴なコメントが見られた。匿名のコメントにおいてもマナーを守るように戒めるのも、今日のインターネット社会においては重要な教育であろう。1年次配当科目においては記述式の回答はおこなわないなどの工夫が必要である。他方、ごく一部の兼任講師の授業態度について、きわめて低い評価があった。講師依頼の際に参考にすべきであろう。

### 4. 担当教員からの所見票に対するまとめ

#### 4-1 「授業評価に対する担当教員の所見」のまとめ

例年のことであるが、学生が予習復習をしない、発展的な学習に取り組もうとしないことに対する教員の失望不満は少なくない。予習復習、発展的な学習に向かわせるためにはどうしたらよいか工夫が必要であるという所見も多かった。そうした工夫の実践例としては、単位取得には予習復習の時間が含まれていることを説明する、リアクション・ペーパーを授業内容に取り入れる、紹介した参考文献を読んでレポートを書いてもらうなどの例が紹介されている。とくにリアクション・ペーパーが効果的であることが報告されている。

授業の静粛性を保つことの難しさ、対策の必要性を表明している例が少なくない。出席率の悪さも指摘されているが、反面において出席した学生の授業態度は非常に良く、教員も満足している。このあたりは上述のようにジレンマである。講義内容をどのレベルに設定するかも教員が迷うところであるが、やや高い方向へ変更したことによって学生の関心が高まったという例が紹介されている。

視聴覚機器の使用については、板書が困難になることや情報伝達量が少なくなる、大教室で後方からは見にくいなどの点で見送っている例が少なくない。上述のように、この質問そのものも、上記のような事情に配慮が必要であろう。板書も多くの教員が頭を悩ます点であり、改善の必要性が表明されている。大教室を使用する大規模授業の場合、設備のより一層の改善が必要だとの指摘が複数ある。

#### 4-2 「記述による評価欄に対する担当教員の所見」のまとめ

学生からの指摘は多様であり、この欄の内容をまとめることは難しい。指摘された諸点については、ほとんどの場合、教員から改善を試みることが表明された。

私語に対する注意については、教員が必ずしも把握しえない場合があることが指摘された。講義の途中で5分間の休憩を取っている授業がいくつかあり、学生には好評である旨報告されている。教室の構造上、遅刻者が前面のドアから入室するために授業が妨げられる。このような教室を1時限に設定するのは問題であるなど、環境改善の要求が指摘されている。

上述のように、学生の積極的な学習態度を引き出すことに多くの教員は腐心しているが、予習を促すために宿題を出しても、それが成績に反映されない限り効果がないことなどが指摘されている。

#### 4-3 「改善に向けた今後の方針」のまとめ

この欄の記述も多様であるが、学生の要望に応じて板書の仕方、私語を止めさせる、聞き取りやすい話し方などについて具体的な改善を約束する記述が多かった。また、学生の学習意欲を高めるための工夫をしなければならないという記述も少なくなかった。

兼任講師から立教大学の方式に慣れていないために配慮して欲しいとの要望があった。設備に関しても要望がいくつかあった。とくに9号館大教室が寒くて耐え難いなどの苦情が数名の教員から指摘されている。

### 5. 今後の授業改善に向けた課題の提示

出席率が低いということは深刻な問題であり、その原因の解明と改善のための対策が必要である。期末試験の受験率や単位取得率との比較も参考にして検討する必要がある。

大人数授業がもたらしている弊害もさまざまな点にあらわれている。それが運営上、不可避であるとするならば、1年次における基礎文献購読および2年次以後の演習との関連性を考え、連携の方法などを工夫することが必要であろう。

学生の学習意欲を高める、予習復習をさせるということも、とくに大人数授業の場合には容易ではない。大人数授業は私学の宿命ではあるが、そこに知恵を絞ることが私学教育を磨くことになるだろう。

## 4-6 経営学部

### 1. 集計データからみられる結果のまとめ

経営学部は2006年度に開設されたため、今回2回目の授業評価アンケートの実施である。そのため、1年次、2年次向けの展開科目に対する評価である点、教員にとっても本年度の新規開講の講義が少なくない点などに注意してデータをみる必要がある。なお、全回答者(7,205人)の内訳は1年生が2,719人、2年生2,608人、3年生1,352人、4年生526人となっている。3年生以上の回答者が26%程度いるが、これは他学部の学生である。

#### 1-1 各項目の平均値

昨年度と比して、全般的に大きな変化は見受けられないが、平均値の上昇している項目が19項目あり、改善傾向が見受けられる。

I 学生自身の授業への取り組みについての自己評価については、各項目ともそれほど悪くない。「出席率」(I 1)は昨年よりは平均値が0.05ポイント低下したが、それでも4.64と絶対値は高く維持している。「積極的に参加している」(I 2)が、「授業の準備」(I 3)や「発展的勉強」(I 4)なども、講義時間以外の主体的な勉強はしていない傾向が把握できるが、昨年よりも各々ポイントが上昇しており、ある程度の意欲の向上が理解できる。

II 教員の授業の進め方、III 授業内容、IV 総合評価の各項目についても、すべて平均点は3.0以上で、昨年同様全般に評価は低くない。とりわけ「教員は授業の準備を周到に行っていた」が4.0以上で、他も3.5以上の項目が多く、全体的に良い評価を得ている。

今回の調査で特筆すべき点は、「自分で調べ、考える姿勢」(III 3)が前回の3.82から3.44と0.4ポイント近く下降している点である。他の項目の上昇傾向に対して、この項目の落ち込みが大きい。これは学生の授業に臨む姿勢が、受動的になっている側面を示していると受け取ることができる。授業での課題などへの取り組みは決していい加減なものではないことが提出物などから読み取ることができるので、課題とは別の問題意識でその領域を更に調べようとする意欲が強くないことを示しているのかもしれない。今後の調査結果を注視したい。

#### 1-2 クロス分析結果

VIの総合評価とクラス規模との関係では、全学的にはクラス規模が小さいほど評価が高い傾向があるが、経営学部の場合に限れば昨年同様そのような傾向はみられなかった。ただし、大規模授業の数自体が多くないので、有意な数値の比較とはいえないことを申し添えておく。

また、学年別の比較では、昨年とは異なり学年があがるほど評価が高くなるという傾向はみられなくなった。今年度は複数の項目で2年生の平均値が最も低くなるという傾向が見受けられる。特に教員の授業の準備(II 9)、授業から得たもの(III 1, 2, 4)総合評価(IV)でこうした傾向が表れている。他学部受講生(3年生以上)の評価が良かったという点は昨年同様であることから、他学部の授業との比較では評価が得られている

ものが、経営学部で2年間授業を受講した学生からは低い評価が与えられていることを意味している。これは、2年生は経営学部の授業の方法に対する評価の姿勢が厳しくなっている傾向の表れかもしれない。

## 2. 担当教員からの所見票に対するまとめ

### 2-1 授業評価に対する担当教員の所見

前回同様、今回が教員にとって初めての開講科目であるものも多く、試行錯誤しながらよい授業を行なおうと懸命に努力している様子が所見にも現れていた。また、昨年度からの開講科目では、前回の評価を参考にして改善を進めている様子が多くの所見から読み取ることができた。昨年同様、静粛性の確保については多くの教員が悩んでおり、人数の割に教室が狭すぎるなどハード面の問題や、授業にただ出席している、小テストの時間帯のみ現れるなど、授業を阻害する学生についての指摘もみられた。

### 2-2 記述による評価に対する担当教員の所見

昨年同様、学生からの意見を真摯に受け止めて、改善しようとしている所見が多くみられた。視聴覚教材や板書や説明のしかた、授業のスピード（早すぎる）などについてのコメントが多かった。また、教員が課す課題の意味が理解できずに批判的なコメントを書かれていたことに対する疑問が示されるなど、学生の授業に向かう基本的態度に対する疑問も課題としてあげられている。

### 2-3 改善に向けた今後の方針

昨年同様アンケート結果を受けて、板書・パワーポイントの見やすさ、資料配布のしかた、静粛性への対処、学生の理解度の把握、出席のとり方、授業のスピードの調整など、具体的な改善案が出されている。

## 3. 学生からの意見の集約

### 3-1 肯定的評価として多い意見の集約

昨年同様、授業、分かりやすさ、教員の話し方や対応、パワーポイント、説明内容、おもしろさ、静か、などが頻出の言葉となっている。また、授業で出される課題に対しても予習として役に立つ、理解が深められるなどの意見がよせられていた。ビデオ教材に対する評価が非常に高く、具体的な上映物をあげて評価している記述も増加していた。

### 3-2 否定的評価として多い意見の集約

昨年同様、授業、スピード、板書、人、パワーポイントの量およびスピード、人数が多い、うるさい、内容、教室などが頻出単語となっていた。授業自体の進度、板書やプレゼンのしかたおよびスピード、レポートなどの量、人数が多い、授業環境（教室が狭い、うるさい）など教育環境のハード面・ソフト面両方に対しての意見が多く寄せられていた。また、出席をとる授業が多いためか、取らない授業に対する批判が寄せられるようになってきた。私語に関しては、学生に非があることを学生自身も理解したうえで、

教員に静肅性を保つ努力を期待する記述、教室の改善要望が多かった。さらに、学生の理解度の確認をしたうえで、授業進度や説明を調整してほしいという指摘も複数みられ、講義の進度と学生の理解度のすり合わせ、90分の講義で提示する内容の調整など今後の課題として取り扱うべきヒントとなる回答が多かった。

#### 4. 今後の授業改善に向けた課題の提示

##### 4-1 授業環境

経営学部は「十分な静肅性が保たれた」(Ⅱ5)の平均値は全学で最も悪いという結果であった。今年度も多くの教員がこのことに悩んでいることが、所見からも明らかになった。また、学生側も学生に責任があることを認めたいうえで、教員による授業管理を強く求めていることが確認できた。静肅性は、退屈な授業、うるさくても注意しないなど教員側の問題、学生のモチベーションの低さなどが絡む複合的問題であるが、それに加え、経営学部は移行期で、経営学部の1・2年生、社会学部産業関係学科の学生、経済学部経営学科の学生などが同一授業に混在しているという特殊事情がさらに悪影響を与えている可能性もある。また、静肅な授業環境を担保する適切な教室の確保、TA、SAの十分な配置も不可欠である。全学的にも私語が大きな問題となっており、大学全体の取り組みと歩調を合わせつつ、学部としても折に触れ、学生への自覚を促したい。

##### 4-2 今後の対応

昨年同様、5スケールの定型的な質問項目からは平均的な傾向、非定型の記述による評価からは良い点・悪い点の両極端の意見が収集できた。記述による評価の肯定的意見では、わかりやすい説明や話し方、見やすいパワーポイント資料、静かな環境の維持があり、否定的意見では授業の量が多い、スピードが早い、板書やプレゼンのしかたが悪い、授業環境(人数・教室)が悪いなどが多かった。これらの意見は、教員が授業改善をしていくためのヒントになる。

理想的なのは、学生が自ら積極的に授業に取り組み、教員もモチベーションの高い学生を相手に教育の質を高め、その結果高い総合評価を得るというパターンであろう。経営学部では、全学でも先駆けてGPAを導入した学部の一つであり、公平な授業評価と講義受講の意義を学生にも明示的に告知している。こうした姿勢をさらに深めていくために、授業運営の総合的改善に向けて早めに対策を立てつつ、完成年度に向け理想的な教育環境の構築に近づけていきたい。

## 4-7 観光学部

### 1. 科目選定方針とねらい

次のような方針で、授業評価アンケートの実施科目を選定した。その結果、選定されたのは、70科目である。

- (1) 学部の設置意図にそって分析しやすいように科目を選ぶ
- (2) 概ねこれまでの実施科目数を目処に、共通科目（必修科目）、共通基幹科目（選択必修科目）、学科基幹科目（必修科目）の全科目と学科基幹科目（選択必修科目）のうち、1・2があるものは、1だけを対象とする。
- (3) 関連基礎科目や語学系科目、専門演習については対象外とする。

### 2. 集計データにみられる結果のまとめ

観光学部の「学生による授業評価アンケート」の結果は、昨年と実施科目も違い、また、2年前に新設された交流文化学科の学生が2年生になり、在籍者数も変わったことから、単純な比較はできないが、回答率は、約8%も上がっている。また、例年と同様に学年が上がるにつれて各評価項目の評点平均は明らかに上昇しているが、学部毎にサンプルとなる学生の学年構成比率が異なるため、単純な比較をすることはできないが興味深い現象である。

回答率については、全学部平均より、6%ほど高くなっている。

**項目Ⅰ**「この授業へのあなたの取り組み方について」は、まず、基本的な条件である授業への出席という面では、I-1出席率(4.59)やI-2積極的な参加(3.76)などかなり高く、学生が努力していることが伺える。一方で、I-3履修にあたっての準備(2.89)、I-6授業の予習・復習(1.71)など授業を受ける前後の取り組みについては、不十分な様子が見えがえる。

学生が意欲的に授業に参加し、勉学に取り組んでいることを示していると思われるが、詳しくは、経年的な分析を踏まえ慎重に解釈する必要があるだろう。

授業規模別の評価については、I1「出席率」は、50名以上が一番低く、順に高くなり、151名以上が一番高い。I4「発展的な勉強をした」は、少人数クラスが高く、大きいクラスは低い傾向にある。その他はあまり大きく変わらなかった。この結果は、必修と選択などの授業の区分が強く反映していると考えられる。

学年別の評価については、I1とI2の授業の出席については、低学年ほど出席率が高い傾向があるが、これは必修科目と関連が強いと考えられる。その他の積極的な授業への取り組み姿勢については、高学年ほど高い傾向が示されており、昨年とも同じ傾向である。

**項目Ⅱ**は、教員の取り組みに対する評価であり、「この授業の進め方は、・・・」については、II-1、「聞きやすい話し方だった」、からII-9「教員は授業の準備を周到に行っていた」まで、すべて、3.0を超え、平均値でも3.69であり、概ね評価は高いと思われる。特に、II-9については、4.08と大変高く評価されていることが特筆される。

授業規模別の評価については、概して少人数クラスの方が高い傾向にある。おそらく少人数クラスは、3年生以上対象の授業が多く、大人数クラスは、低学年の必修科目の授業が

多いことが影響していると考えられる。

学年別の評価については、ほぼすべての項目について、1年生<2年生<3年生<4年生となっており、例年と同じ傾向を示している。

**項目Ⅲ**「この授業から得るものができたこと」についても、平均値は、3.58で、すべて3.0を超えている。ただし、授業から新しい考え方や知識を学んだことについては、評価が高いが、反面Ⅲ-3「自分で調べ、考える姿勢についての評価は、3.21であり、受け身で授業を受けていることを学生も自覚しているようだ。

授業規模別の評価については、この項目についても、少人数クラスほど高い評価になっている。

学年別の評価についても、きれいに1年生<2年生<3年生<4年生となっており、例年と同じ傾向を示している。

**項目Ⅳ**「総合的に見て、この授業は・・・」については、項目ⅡとⅢに示された授業をする側に対する総合評価的なものであると考えられるが、平均値は、3.62であり、個別の4項目の評価も似かよっている。平均値的に見れば、まずまずの評価ではないかと考えられるが、まだ満足のいく状態ではなく、それぞれの科目で改善に取り組むことが必要であると考えられる。

授業規模別の評価については、傾向として、大人数クラスより、少人数クラスの方が評価は高いが、50人以上よりも、51~100名の評価が高いのは興味深い現象である。

学年別の評価についても、きれいに1年生<2年生<3年生<4年生となっており、例年と同じ傾向を示している。

**項目Ⅴ**「学部等による設問」においては、V1「わたしの成績は、観光学部の中で良いほうだ」が、2.85であり、学生の自己評価は、控えめである。おそらく、Ⅰの設問の中に現れているように、授業に準備をして出席していないこと、復習などもしていないなど、勉学に対する態度の反映であるように思われる。

V2「授業中の飲食・私語について」とV3「新座キャンパスで学ぶことへの満足度」に関して、高い評価が得られたと考えられる。V2については、否定的な意見を持つ学生が増えているが、一般的には、新座キャンパスでの授業は比較的静かであると評価されているので、特に心配することはないだろう。

V3については、大きくプラスの評価を受けている。2006年度から新座キャンパスに新しい建物ができ、また既存建物などもリニューアルされた。それによって、以前とは見違えるほど、施設も造園も充実し、景観・環境的にも大きく向上したと感じているが、このことがアンケートにも素直に反映していると考えられる。

V4「私は旅行が好きだ」について、さすがに観光学部らしく平均4.48と非常に高くなり、すべての項目の中で最高の値だった。授業の成果と言えるかは、判断できないが観光学部で学ぶ適合性を持った学生がほとんどであることを示している。

V5「授業を通じて、観光関連の仕事に興味を覚えた」およびV6「授業を通じて、観光



を学ぶことにより興味をわいた」が、3.21 と比較的低く、授業内容などに一層の工夫が必要であると考えられる。

授業規模別の評価および学年別の評価については、項目 I から IV までは、差が見られたが、V については、評価が変わらない。

観光学科と交流文化学科の差については、全体的に観光学科の学生の方が、授業に積極的に取り組み、授業に対する評価も高い。ただ、2007 年度は、交流文化学科の在學生は、2 年生までしかおらず、上記したように高学年になるほど評価が上がる傾向にあるので、その影響が出ていると考えられる。したがって、今回の授業評価からは有意な差は認められない。

### 3. グループ集計にみられる結果

#### 3-1 グループ集計の分類

グループ集計は、科目の特徴から次のような 6 グループに分類して実施した。

- (1) 必修科目 9 科目 (交流文化論など)
- (2) 100 人以上大規模授業科目 11 科目 (旅行産業論など)
- (3) 100 人未満 50 人以上科目 10 科目 (経営戦略論など)
- (4) 50 人未満科目 15 科目 (データ処理など)
- (5) 30 人未満極小科目 9 科目 (比較文化論 1 など)
- (6) HB 交流文化科目 8 科目 (地域研究法 1 (地理学) など)

#### 3-2 グループ集計の結果への評価

ここでは、全体平均との比較を中心に各グループの特徴的な面について評価を行った。前期と学年末の 2 回行っているが傾向が似ているので、前期を中心に分析を行っている。(評価の数字の「前」は前期、「後」は学年末に実施したことを示す)

##### 1) 必修科目 9 科目 (交流文化論など)

I 1 「授業全体を通じての出席率」は、グループ平均で、前 4.7、後 4.6 (最高は、前 4.9) と高く、学部全体平均 4.59 を超えている。必修科目は出欠を取っていることが多いのでそれが反映しているものと思われる。

I 2 「この授業に積極的に参加した」となると意識の面が大きくなるので、必修科目のグループ平均 (前 3.7、後 3.8) は、学部平均 (3.76) とほぼ同じになる。

以下、総じて、自分の意志で選んだ科目とは言えない場合もあるので、学部平均に近い傾向になる。ただ、科目によるばらつきも大きいので、授業の工夫により改善の見込まれる部分も大きいと思われる。

##### 2) 100 人以上大規模授業科目 11 科目 (旅行産業論など)

I 1 「授業全体を通じての出席率」は、グループ平均で、前 4.5、後 4.6 であり、大規模であるが比較的良い出席率である。

また、大規模授業で心配されるⅡ5「静肅性」についても、グループ平均で、前 3.9、後 3.6 であり、学部全体平均 3.72 より前期は高く、学年末は低い評価となっている。低学年の必修科目がこのグループに該当する場合が多いので、大学に慣れて、友人との授業中の会話が目立つようになったと考えられる。

Ⅱ7、Ⅱ8 など板書や視覚教材の使用などに関して、平均よりいずれも低くなっており、大規模な授業については、さらに改善の余地が大きいと考えられる。

### 3) 100 人未満 50 人以上科目 10 科目 (経営戦略論など)

I1「授業全体を通じての出席率」は、グループ平均で、前 4.3、後 4.5 (最高は前 4.7、最低は前 2.9) と学部全体平均 4.59 よりも低い。

また、Ⅱ5「静肅性」については、グループ平均で、前 4.5、後 4.2 であり、学部全体平均 3.72 より高いかなり評価となっており、静肅性が保たれていることが表れていると考えられる。Ⅱ7、Ⅱ8 など板書や視覚教材の使用などに関して、平均より高くなっており、最適な授業規模を考える上で参考とすべきことだろう。

### 4) 50 人未満科目 15 科目 (データ処理など)

I1「授業全体を通じての出席率」は、グループ平均で、前 4.3、後 4.5 と低く、学部全体平均 4.59 を下回っている。しかし、I2「この授業に積極的に参加した」となると意識の面が大きくなるので、50 人未満科目のグループ平均 (前 4.0、後 4.0) は、学部平均 (3.76) よりも高くなっている。静肅性も当然ながら、グループ平均で前 4.6、後 4.8 と非常に高く保たれている。同様に、Ⅱ7、Ⅱ8 など板書や視覚教材の使用などに関して、平均より高くなっている。

### 5) 30 人未満極小科目 9 科目 (比較文化論 1 など)

I1「授業全体を通じての出席率」は、グループ平均で、前 4.3、後 4.5 と学部全体平均 4.59 よりも低い。I2「この授業に積極的に参加した」となると意識の面が強まるので、30 人未満極小科目のグループ平均 (前 4.1、後 4.3) は、学部平均 (3.76) よりも高く、今回のグループでもっとも高くなっている。

### 6) HB 交流文化科目 8 科目 (地域研究法 1 (地理学) など)

I1「授業全体を通じての出席率」は、グループ平均で、前 4.4、後 4.5 とやや低く、学部全体平均 4.59 を下回っている。また、I2「この授業に積極的に参加した」についても、HB 交流文化科目のグループ平均 (前 3.5、後 3.5) は、学部平均 (3.76) よりも低くなっている。一般的には、専門性の高い科目は、積極的に参加する傾向にあるのだが、このグループについては、専門性がありながら、低めに出ているので、この科目などに遡って精査することが望まれる。ただし、専門性はあるが、交流文化学科については、2 年生を中心とした低学年の科目であるので、その影響が強いと考えられる。

静肅性は、グループ平均で前 3.6、後 3.2 と観光学部全体平均 (3.76) より低い。ま

だ低学年の学生しかいない交流文化学科の授業の特徴が表れていると言える。

#### 4. 今後の改善へ向けて

アンケートから読み取れる特徴的なことは、まず、学生が授業に積極的に参加する傾向は変わらず継続しており、より高度な観光学に内容に触れて満足感が得られるように授業の工夫をしていくことが必要であろう。また、高度化する授業をしっかりと理解するには、学生も予習・復習に時間を取り、分からないことがあれば質問をするなど、授業を受ける基本的な心構えを持って欲しいと思う。いずれかの機会にこの点について、学生に話をすることも必要だろう。

大規模授業に伴う「教室の静粛性を保つ」ことや「適切な板書や映像視覚教材の使用」については、予想されたように、大規模な授業ほど評価が低くなる傾向にはあるが、深刻な問題とはなっていないと考えられる。大規模授業の中にも平均を超える評価を得ている科目もあるからである。教員側の授業の進め方によって相当改善が見込まれるものと考えられる。

全体的には、前年の評価と同じような傾向にあり、ほぼグループに分けた場合にも予想されるような評価結果になっていると考えられる。今回は、充分考察ができないほどの集計結果が出ているが、これをどのような改善につなげていけるかが問われているのであると考えられ、改善策の検討に力を注ぐことが、この成果を生かすことにつながると考えられる。

## 4-8 コミュニティ福祉学部

### 1. 科目選定方針とねらい

コミュニティ福祉学部ではアンケートの科目選定方針を「1 教員 1 科目の原則」を基本とすることとして次の科目を追加した。

- ① 学部専門の入門的講義科目、必修講義科目（オムニバスを除く）
- ② 社会福祉士・精神保健福祉士・社会調査士・初級スポーツ指導員の資格科目
- ③ 基礎演習

コミュニティ福祉学部の入門的講義科目、必修講義科目、それぞれの資格科目の評価を各科目担当者で行っていただき授業の充実を図る。また、福祉学科とコミュニティ政策学科の 2 学科間の評価に差異があるのか、一定の傾向があるのかを明らかにすることをねらいとした。今年度は演習科目と実習科目については対象から外したが、基礎演習についてのみグループ集計によって分析を行った。

### 2. 集計データにみられる結果のまとめ

履修者数と回答者数、および回答率については 2006 年度と比較して、アンケート実施科目が多かったため回答者数も多くなっている。回答率が 6 ポイント増加しており授業の出席者が多くなっている。

学年別の回答者数については他学部と同じように 1 年、2 年の回答者が多かった。

授業規模別の値をみると、人数の多い少ないでの値の違い、あるいは一定の傾向はほとんど見られなかった。唯一、静粛性については規模が小さい授業ほど静粛性が保たれているという傾向が見られた。

設問項目の平均値についてしてみると、Ⅰこの授業へのあなたの取り組み方については出席率についての平均値が 4.55 と高い値になった。しかし、発展的に勉強したかという問いに対する数値が 2.92 と低かったり、予習復習に当てた時間が少なかった。全学部平均値との比較がないのではっきりしたことはいえないものの、コミ福の学生は授業にはまじめに出て、参加しているが発展的な学習につながっていないことがわかる。Ⅱこの授業の進め方…についてはほぼすべての項目が 3 から 4 の間であり、授業については概ね問題ないと評価されているものと思われる。特に教員の授業準備に関しては 4 を超えた数値であり、各教員の取り組みが評価されたものであろう。Ⅲこの授業から得るものができたこと、Ⅳ総合的にみて、この授業は…については 4：そう思うと 3：どちらともいえないの中間の値を示していた。その中で、自分で調べ、考える姿勢が 3.24 と低く、ここでも発展的な学習につながっていないことがわかった。

学科別の平均値をみると、設問項目すべてにおいて 3 学科ともに同じような数値であったが、若干コミュニティ政策学科の数値が低い傾向が見られた。

### 3. グループ集計にみられる結果

#### 3-1 基礎演習

基礎演習をひとつのグループにまとめて平均値をみると、学部平均値や学科平均値と同じような値を示すが、各教員の数値にはばらつきがみえる。例えば、「シラバスは受講

に役立った」、「予習復習等にあてた時間」、「映像視覚教材の使用が効果的だった」「話し方」「ねらい」などの項目では各教員によって違いが明確にみられた。このような結果が、IV-4 この授業を受けて満足した、の項目でも 2.4~4.6 までの値の違いに現れた。

### 3-2 福祉学科専門基礎科目・専門基幹科目

### 3-3 コミュニティ政策学科専門基礎科目・専門基幹科目

前期と後期を含めた科目で福祉学科専門基礎科目・専門基幹科目とコミュニティ政策学科専門基礎科目・専門基幹科目を2グループに分けて平均値を比較したところ、総じて福祉学科科目がコミュニティ政策学科科目より高い値を示しており、特にIV総合的にみてこの科目は…の項目で比較的大きな差がみられた。

## 4. 今後の改善に向けて

コミュニティ福祉学部の科目で共通していえることは学生の授業への取組みの中で予習復習の時間が少ないということである。どれだけの時間が必要かという問題は別にして1.5という値は、ほとんどの学生が1時間未満か0時間ということであり、これでは発展的な学習は望めない。担当の教員は課題を与えるなり、参考文献を紹介するなどで次のステップを明示する必要があるように思われる。

各教員は授業に至るまでの準備については高い評価を得られている。また、授業に関しても概ね良好な評価であった。このことについても5段階のどこまでの評価を求められているかがはっきりしないが、各項目について少なくとも「3：どちらともいえない」よりも「4：そう思う」に近い値にもっていくように努力する必要があるだろう。

基礎演習については各教員の評価のばらつきがあり、聞きやすい話し方だったか、授業のねらいがはっきりしていたか、あるいは視覚教材の使い方などの授業への工夫が授業の満足度に反映されていたようなので、毎時間の授業を丁寧に目的をもって行うことが重要であると思われた。

学科間の違いについては、コミュニティ政策学科科目について、やや低い値が示されたが、改善の方策を考えると同時に、科目の内容や学年の違いなど、多面的で慎重な分析が必要であるように思われる。

## 4-9 現代心理学部

### 1. 科目選定方針とねらい

現代心理学部は、2006年4月開設の新しい学部である。心理学科は長い歴史を有するが、そのカリキュラムと授業展開は従来と異なるところも多い。また、映像身体学科は全国的に見てもあまり例を見ない新設学科であり、まだ2年を経たばかりである。

現代心理学部では、①講義科目1教員1科目、②共通科目で、複数開講科目（専門演習以外）、③初年時教育科目（入門および概説系科目）を科目選定方針としている。前記③の科目選定方針をふまえ、心理学概説1および心理学概説2をグループ集計の対象とした。これらは、複数教員によりオムニバス方式で展開される授業の構造をもっており、学生による授業評価アンケートの集計結果を担当教員で共有することがFDに資するものと判断されたためである。同様に、心理学科と映像身体学科の協働で展開される現代心理学入門についても、上記と同じ趣旨でデータのフィードバックを行った。しかし、グループ化が可能な比較対照科目がなかったため、集計結果の読み取りからは除外している。

### 2. 集計データにみられる結果のまとめ

グループ集計の対象とされた心理学概説1および心理学概説2は、1年次の必修科目である。よって、1年次の学年別平均値のデータとの比較を試みた。1年次平均値より0.3以上の乖離があった場合を一重下線、0.5以上の乖離があった場合を二重下線で示した。

項番号	設問項目	1年次平均値	心理学概説1	心理学概説2
I-1	授業全体の出席率	4.66	4.8	4.8
	2 積極的な参加度	3.79	3.9	3.9
	3 履修に際しての十分な準備	2.83	2.9	2.9
	4 授業を契機とする発展的学習	2.85	2.9	2.9
	5 シラバスの有用性	2.95	2.9	2.9
	6 予習復習に充てた時間	1.80	2.0	1.9
II-1	授業時の話し方の適切さ	3.45	3.7	3.6
	2 授業内容の量の適切さ	3.62	3.7	3.7
	3 授業のねらいの明確さ	3.52	3.8	3.7
	4 毎回の授業内容の明確さ	3.54	3.8	3.7
	5 十分な静粛性の確保	3.38	3.3	3.3
	6 教科書・配布資料の有効性	3.46	<u>4.0</u>	3.7
	7 板書の適切さ	2.98	<u>3.3</u>	3.2
	8 映像・視覚教材の有効性	3.73	4.0	3.7
	9 教員の授業準備の周到さ	3.94	4.2	4.0
III-1	新たな考え・発想の獲得	3.84	3.7	3.8
	2 基本的な専門知識の獲得	3.60	<u>4.0</u>	<u>3.9</u>
	3 調査・思考態度の獲得	3.17	3.1	3.1
	4 現代的・普遍的意味の獲得	3.42	3.3	3.2
IV-1	わかりやすい授業だった	3.41	3.6	3.5
	2 授業全体の目標が明確だった	3.46	3.7	3.6
	3 学問的興味をかきたてられた	3.66	3.9	3.9
	4 この授業を受けて満足した	3.57	3.7	3.6

次項との関連から、1年次の学年別平均値に関する5段階評価による集計データを見た。その結果、受講者が「予習復習に充てた時間」は不良な(1.80)ことがわかる。また、「履修に際しての十分な準備」(2.83)や「授業に際しての発展的学習」(2.85)も良好とはいえない。その一方で「授業全体の出席率」(4.66)は良好であった。

授業の進め方についてはおおむね良好な評価(3.38~3.94)が与えられているが、唯一の例外が「板書の適切さ」(2.98)であった。

授業の内容についてもおおむね良好な評価(3.17~3.84)が得られた。

授業に関する総合的評価についてもおおむね良好(3.41~3.66)であったといえる。

### 3. グループ集計にみられる結果

#### 3-1 グループ集計の結果

先に示した表により、設問項目の大多数において1年次平均値をグループ集計の結果が上回っていた。ただし、「シラバスの有用性」(-0.05)、「十分な静粛性の確保」(-0.08)、「新たな考え・発想の獲得」(-0.14)、「調査・思考態度の獲得」(-0.07)、「現代的・普遍的意味の獲得」(-0.12)について1年次平均値を下回っていた。その多くは受講者の主体的な学習を喚起することにかかわる設問項目であった。

#### 3-2 心理学概説1

1年次平均値に較べて、「教科書・配布資料の有効性」(+0.54)、「板書の適切さ」(+0.32)、「基本的な専門知識の獲得」(+0.40)の評価が高くなった。

#### 3-3 心理学概説2

1年次平均値に較べて、「基本的な専門知識の獲得」(+0.30)の評価が高くなった。

### 4. 今後の改善に向けて

2007年度は、授業運営上の課題の是正し、クラスサイズの大きな授業においても効果的な実施に留意し、さらに複数教員による担当科目についてFDをはかることを企図しつつ科目選定(グループ化)を試みた。とくに、大学導入教育にあたる初年時教育科目(入門および概説系科目)についてグループ集計が行われた。その結果、「初年時教育科目のねらいのより一層の明確化」をはかる必要性、「受講者の主体的学習の喚起」をはかる授業実施条件の検討、「授業者の効果的な授業技術のさらなる発展」をうながす条件整備と研究の必要性、「(学部・学科の独自性にもとづく)固有の設問項目の考案」の必要性が課題になると考えられた。前者3項目について、以下に改善策を略記する。

#### 4-1 初年時教育科目(入門および概説系科目)のねらいのより一層の明確化

「基本的な専門知識の獲得」はおおむね達成されており、その後の学修に際してこれで良しとするのか、さらに付加的なねらいを含めるのかを、担当者間でより一層共有する。

#### 4-2 受講者の主体的学習の喚起

担当教員の所見にも見られるが、「自学自習をうながす学習指導が必要」である。そのために、「参考文献の紹介」や「小レポートの課題提示」が求められる。考慮を要する。

#### 4-3 授業者の効果的な授業技術のさらなる発展

これも担当教員の所見に見られるが、「ビデオ教材などの映像視覚教材の導入の努力」が必要である。また、「パワーポイントを中心とする場合の板書の併用についての工夫」が求められる。このことは、高等学校段階までのノートの取り方が板書の視写活動が中心であることと関連している。大学における学修の仕方を習得させる方策が必要である。



## 4-10 全学共通カリキュラム

### 1. 科目選定方針とねらい

今年度は、履修者数 100 名以上の講義系科目（総合Bを除く）にアンケートの対象を限定し、教育研究室毎のグループ集計を実施した。これは、全カリの教務上の最大問題が大人教授業対策であることから、大人教科目の授業内容の質的向上を図るための方策を探ろうとしたのである。

抽選登録の実施等が功を奏し、かつてのような、とてつもない大人教授業は姿を消しつつあるが、それでも、全学部・全学年の学生が自由に履修可能という全カリのしくみからいって、この問題の根絶は困難である。静粛性が保ちにくく、学生の満足度も一般に低い大人教科目が、1年生が多数受講する全カリ科目に多く存在することは、全学的に教学上のモラル低下を引き起こす大きな要因である。以下の教育研究室毎の検討でみるように、開講科目数を増やすだけでは解決は難しく、個々の科目の性格や教員の資質に応じた対策が求められている。今年度のアンケート対象を上記のようにしたのは、全カリ執行部および各教育研究室が、そうした対策を講じる際の参考にしようと考えたからである。

### 2. 集計データにみられる結果のまとめ

データの出方はほぼ予想通りで、個々の授業について差はあるものの、全体としては、履修者数 100 名以上の科目の中でも履修者数の多い科目が、またその中では回答者数の少ない（つまり出欠をとらない）科目が、満足度が低い傾向がみられた。そうした科目では教員はあまり板書せず、プリントもほとんど配られず、視聴覚教材の利用頻度も低いことが多い。各学部の専門教育科目と比べても、全カリの講義系科目の多くは、教育技術上、改善の余地が大きいことが確認された。

とくに注目されるのは、設問Ⅱ-5「十分な静粛性が保たれた」のデータである。前後期、計8グループについて、設問別帯グラフのうちのこの部分を検討すると、やはり履修者数と静粛度は全体として反比例することがわかる。（各グループ内は履修者数の多い順に科目が並んでいるので、下に行くほど数値が高くなることははっきり見て取れる。）その一方で、履修者数・回答者数ともに多いのに、この静粛度が極めて高い科目が相当数存在することも確認できた。これは、履修者数が多くても、また評価に出席点を加味しないことで「やる気のある学生だけ出て来させる」などといった方策に頼らずとも、静粛性を保つ方法があり、一部教員によってそれが実践されていることを示している。静かに話を聞かせるためには、授業の質・内容の向上が基本であろうが、授業技術上の種々の工夫が必要であろう。

### 3. 担当教員の所見票に対するまとめ

まず、所見票を記入していない教員が4分の1近くに上ることに驚かされる（「昨年と同じ」とのみ書いている例もある）。アンケートのマンネリ化も一因かもしれないが、全カリ講義系科目における教員の授業意欲という点で、考えさせられるものを含んでいる。その一方で、授業改善に向けて毎年工夫を怠らない、大多数の教員の姿も、所見票から浮かび上がった。

予備学習を行わせることの困難に触れている所見が複数あったことは、全カリの本質にかかわる問題である。全学部・全学年の学生が受講可能ということは、予備学習不要ということの意味しない。こうした点での教員・学生間のミスマッチが、学習意欲喪失・私語増大の一因となっているとも考えられる。

学生の私語に関する意見は当然ながら多数に上った。「人数制限をしてくれ」という要望のほかにも多いのは、「叱り方が足りなかった」という反省と、「いくら声を枯らしても馬耳東風」という諦念の吐露である。授業の性格ばかりでなく、教員の様々な資質に応じて、教室内での対応が異なっていることが想像される。

#### 4. 学生からの意見の集約

授業の物的環境と私語についての苦情が多いのは、アンケート対象からいって当然である。ただその多さが、授業規模と比例しないケースもあるのは興味深い。

履修登録の早期化により、近年の学生は、シラバスを（専攻外の全カリ科目についてはとくに）丹念に読み、登録科目を決定している。そのため授業とシラバスが異なると「約束違反」と感じる傾向が強まっていることが窺える。この点、授業を提供する側は注意を要する。シラバスというものの役割が以前と違ってきているということ、教員にも理解してもらおうよう、各教育研究室は努めねばならない。

リアクションペーパーの提出等、双方向性を高めるための教員側の姿勢は学生の授業に対する意欲の向上に繋がっていると思われる。その一方、授業の物的環境を整えても、ただ視聴覚教材を使うだけでは学生は満足しない。パワーポイントの出来など、学生は厳しく評価している。ハード面ばかりでなくソフト面でも十分に練られた勉学環境を享受することを、現代の学生は当然の権利と受け取っている。教室設備やカリキュラムとして授業を提供する大学側としても、こうした面での教員へのサポートを充実させる必要がある。

#### 5. 今後の改善に向けて

受講に際して要求される予備知識について、教員・学生間のミスマッチを減らす工夫が必要であり、シラバスの執筆に注意が払われるよう、各教育研究室は科目担当教員に徹底を図ることが望ましい。私語対策についても、各教育研究室は、個々の教員の資質を把握した上で、開講科目ごとにきめ細かく対応する必要がある。

2008年度の全カリ機構改革によって目指されている教育研究室機能の強化は、大人数授業の諸問題を解決していく方向でなされるべきである。アンケートから、大人数教室での静粛性維持のノウハウを持つ教員が複数いることは明らかであり、その相当数は教育研究室メンバーによって把握されているはずなのだから、各教育研究室がそうした工夫を吸い上げ、全カリ全体に（ひいては全学に）普及を図れるようなしかりとしたしくみを作る努力をすべきである。

#### 6. 各教育研究室運営科目の総評

##### 6-1 人文学教育研究室

学科等平均値の表をみると、設問Ⅱ-9「教員は授業の準備を周到に行っていた」の

値が他の教育研究室より低いのが、個別データをみると、いくつかの特定の科目が平均値を大きく引き下げていることがわかる。まるで準備していないかの如く見せかけるのも授業スタイルのうちかもしれないが、学生のコスト意識が高まっている今日、教員が授業に不熱心であるかのような印象を与えることは許容されにくい。教育研究室としては細やかな対応が必要と考える。

所見票の記載の中では、教室設備と試験方法に関する、「表象文化」の佐藤一彦教授の問題提起（映像教材の利用についての物的・制度的制約が厳しすぎる）を重く受け止めたい。芸術系の科目を中心に、授業・試験とも、方法が物的に多様化しており、教務実務がその動きに十分対応できていない。こうした問題は大人教授の多い全カリで最初に顕在化することが多く、教育研究室がそうした教員の意見を十分吸い上げ、全学教務委員会や担当部局に伝えていくことが、全学的にも重要と考える。

## 6-2 社会科学教育研究室

今回アンケートの対象としたのは履修者数 100 名以上の科目で、その数は各教育研究室中、社会研が最も多い。本学では社会科学系学部の学生数が多いことを勘案して、全カリにおいてもこの方面の開講科目数を最大とし、とくに池袋では同一時限内に魅力的な科目を多数揃える努力をしているのに、学生がこちらの意図通りに分散してくれない。全カリのしくみそのものから来る上記の諸問題が量的に一番深刻に表れているのが社会研の運営する大人数科目である。所見票からは、こうした状況に立ち向かうべく、教員があらゆる方向で努力していることが窺える。成功事例の分析が、教育研究室としては急務である。

学科等平均値の表では、最初の設問（授業全体を通じての出席率）の値が他の教育研究室より低い。アンケートに回答しているのは比較的勉強熱心な学生のはずなのに、こうした数値になるのは、受講者の多くを占める社会科学系学生（とくに経済・経営）の気質の問題が背後にあるとも想像される。しかし他の設問でも概して値が高くないという事実は、あまりに開講科目数が多いので、教育研究室のコントロールが及びにくいという側面があることを示唆している。これは機構上の問題であり、今後改善していかなければならない。

## 6-3 自然科学教育研究室 / 情報科学教育研究室

今回のアンケート対象科目のうち情報研の運営する科目は3つだけだったので、グループ別集計では自然研と一括してある。以下でも同様に扱う。

自然研・情報研が運営する大人数科目の数は、他の教育研究室に比べ多くないが、上位のいくつかの科目（前期には履修者数 700 名を越える科目があった）の状況には深刻なものがある。つまり一部科目への学生の集中が顕著である。学科等平均値の表でみると、25 の設問のうち 15 で、自然研（FE）の値が他の教育研究室より低い。これは自然研が運営する大人数科目の多くで、授業内容・学生間の落差が大きいことを示している。

本学で大多数を占めるのは人文・社会系の学生である。自然系（スポーツ系を含む）の科目中から最低 4 単位を修得せねばならぬという全カリ科目履修の規定が彼らには重

く感じられるため、「単位取得が容易だ」と噂される科目に彼らの履修が殺到する傾向があるのは明らかである。自己の知的関心とは無関係の選択であるから、当然学習意欲は低くなる。これが上記の落差の主たる原因と考えられるので、授業内容を平易にするための個々の教員の努力のみでは、問題は完全には解決しないであろう（所見票からもそうした面での各教員の苦悩が窺い知れる）。とって、規定をこれ以上緩めるという選択肢がない以上、授業運営・成績評価の可能な限りの厳正化に努めるというのが、現時点で教育研究室として考えられる唯一の方策である。授業内容改善にむけた個別の努力はむろん不可欠であるが、学生が真に自己の知的関心に従って科目選択ができるよう、制度を変えていく必要もあるのではないか。

#### 6-4 スポーツ人間科学教育研究室

学科等平均値の表では、スポーツ人間研が運営する科目は概して好成績を収めている。学生に身近なテーマを扱った科目が多いということもあろうが、基本的には、教育研究室の統括下でなされた個々の教員の涙ぐましい努力の結果であることは、所見票からも明らかである。

ただ、上記の自然研の場合と同様の事情から、履修が特定科目に集中することは避けられず、とくに後期では履修者数ランキングの1位・2位をスポーツ人間研の運営する科目が占めている。しかし、グループ別集計のデータで設問別の帯グラフをみると、授業規模にあまり関係なく、全体に学生の満足度が高い（さすがに履修者数トップ[918名]の科目では「静粛性」の数値が低い）ことがわかる。上記のような、運営する科目の性質ということもあるかも知れないが、概してこの分野の教員が、専攻からいって学生の心理把握に長け、静粛性を保つスキルも高いということがあるのかも知れない。だとすればそのノウハウが、教育研究室を介して全カリ全体に広まっていくことが望ましい。

## 4-1-1 学校・社会教育講座

### 1. 集計結果にみられる結果のまとめ

2006年度と比較して、全体としては大きな数値の変動はみられない。ただし、有意差の出た項目をみるといずれも若干ではあるが、数値が下がっている。特に授業の進め方に関する項目では9項目中4項目において有意差がみられる。「聞きやすい話し方」「静粛性」「板書」「映像視覚教材の使用」等の項目がそれに該当するが、それでも全体としては高い数値であり、あえて問題視する必要はないと考える。

### 2. 担当教員の所見票に対するまとめ

#### 2-1 「授業評価に対する担当教員の所見」のまとめ

ほとんどの教員が授業評価をおおむね妥当な評価であると受けとめている。思ったよりも高い評価を得て、さらに授業への取り組みを改善したいという声も結構多くみられた。ただし、Iの4)および6)に関しては、担当教員の工夫により数値を高めることができるのか、科目の性格によってはそれも限界があるという担当教員側の戸惑いが少なからずみられた。また、設問自体に適切でないものがあり、特に質問項目Ⅲ群に関して「教えるための知識や技術が身に付いた、現代の教育の抱える課題や問題が理解できた、教師にとって必要な脂質や考え方が理解できた」という項目に差し替えたらどうかという意見があった。科目の性格と質問項目をどうかみ合わせるかは個々の科目に合わせた質問項目を設定することができない以上、常について回る問題であると思われる。これまで講座は特に講座独自の設問を設けてこなかったが、独自の項目を設定する必要があるかも知れない。今後の課題である。

#### 2-2 「記述による評価に対する担当教員の所見」のまとめ

あまり記述は多くないようだが、「記述を読むと、授業において学生としっかりコミュニケーションが取ることがされていたのだと感じられた。こちら側が提供したことを学生達はしっかり受けとめてくれたように感じる。学生と共に授業を作っていた成果だと思う」という意見に代表されるように、記述に関してはおおむね肯定的に受けとめている所見が多かった。また「学生個人の記述による評価の意見を見ると、同じ授業を受けていても個々の学生の理解度、感じ方によって実に様々であることがわかり、参考になった」という意見にみられるように、授業担当者にとって記述は数値以上に貴重な評価として受けとめているようである。

#### 2-3 「改善に向けた今後の方針」のまとめ

「記述による評価で書かれていた点を参考にしながら、改善したいと思う。例えば、話す用語に若干難しさを感じる受講生が存在しているのであるから、少なくとも言い換えるように配慮したい。又、評価の分かれている点に関しては、どこで折り合いをつけるのかを考えたい」「1板書については、どこを補足しているかを明示しながら、書くこととしたい。2学問的興味、新しい観点を身につけたいという点で低い評価だったので、もう少し理論的な内容を加味したい。3授業内容は、受講生との関係で変更してき

ているが、シラバスにその点を加味した標記にしておきたい」に代表されるように、それぞれの授業担当者は様々な改善策を講じようとしている。また、「体験型の授業は学生の満足度が高く、また知識の定着率も高いことがこれまでの授業運営の経験から明らかになった。(中略) 講義型の授業スタイルが多い中で、体験型、コミュニケーション方の授業スタイルがもつ意義は非常に大きいと考えている。今後も積極的に展開していきたいと考えている」にみられるようにこれまでの授業スタイルを一層展開していく旨を記した所見も少なからずみられた。ただ、一方で「考えられる努力はするが、これまでの教授経験から 130 名の学生を毎時間満足させる改善には限界があると思われる。教育の質と量の問題は密接に関係していると思われるので、次年度からはクラス人数を制限すべきと考える」という個々の授業担当者の改善への努力だけでは限界があるという意見もあった。

### 3. 学生からの意見（記述による評価）の集約

#### 3-1 「肯定的評価として多い意見の集約」

教師の人柄、プレゼンテーション・ワークショップ・ロールプレイング等の活用、レジュメ・プリントの活用、内容が実践的、映像教材の活用、授業の目的が明確等の意見が比較的多くあげられていた。

#### 3-2 「否定的記述として多い意見の集約」

圧倒的に多いのが板書に関するもので、もっと丁寧に、きれいにといった意見が多く見られた。また、声が小さい、不明瞭といった教員の声に関する意見も結構みられた。おそらく大人数の授業なのであろうが、私語を指摘する意見も結構あり、教員はもっと注意すべきだという意見がかなりあった。学生同士お互いに注意することには躊躇があるようだ。最近よく使われるようになったパワーポイントに関してもその使い方が適切ではないという意見も結構みられた。

### 4. 今後の改善に向けて

多くの教員は学生達の評価に真摯に対応しようとして、授業の改善に取り組んでいることがよくわかる所見であると思われた。また、学生も基本的にはきちんとした評価を下しているとみることができる（もちろん、一部には的外れの評価も管見したが）。その意味ではこうした授業アンケートの意義はあると思われるが、一方で次のような厳しい指摘もある。「大学側がどれだけ教員をサポートする気があるのか。毎年同じアンケートの繰り返しで、自分で改善できるものであればとっくに改善している。もっと授業改善に役立つ体制、支援、費用など大学側の具体的な提案や方針を聞きたいものだ。バカの一つ覚え的な授業アンケートで授業が変わるのであれば誰も苦勞しない。」こうした意見を極論だと一蹴できるであろうか。個々の教員の努力・工夫はもちろん必要であろうが、それだけに集約されてしまつては、毎年同じことの繰り返しになる可能性は高いと思われる。あらためてこうしたアンケートの目指すものが何であるのかを検証すべきではないかと思われた。



## 5. 2007 年度のまとめと今後の展望

教育調査の検討グループ  
座長 菊地 進

「学生による授業評価アンケート」は、2004 年度の全学実施以降、2006 年度までの 3 年間は、講義科目を対象に 1 教員 1 科目の原則で実施してきた。これにより、教員個々人の授業改善への意識が高まり効果が上がったことは、各項目の数値が有意に上昇したことから明らかであり、授業評価アンケートは全体として大きな成果をもたらしたといえる。

しかしながら、一方では、繰り返しによる効果の低下を懸念する声もあったことを受け、4 年目となる 2007 年度は、スタート時に確認された目的のうち、「学部・学科としてカリキュラムの有効性を測定するための資料を得る」「大学として教育力向上に必要な方策を立てるための資料を得る」により比重を移し、実施することを決定した。具体的には、1 教員 1 科目の原則に限定せず、各学部・学科等の必要性に応じて選定を行うことを可能とした。

科目選定にあたっては、各学部等の教務に責任を持つ教員が集まり、これまでの授業評価アンケートの経緯や他学部の方針等についても理解を深めた上で、学部等で科目を決定した。この集まりは、「授業評価アンケート打ち合わせ会」という形で発展し、設問項目の検討や、学生に責任ある回答を促すための方策、新たに実施したグループ集計についても検討を行った。さらには、授業評価アンケートだけでなく、2006 年度に実施した「カリキュラム・学習環境アンケート」などの各種教育調査結果や初年次教育の状況などについても学部を超えて共有し、意見交換を行う場となった。

また、かねてより可能性が指摘されていた Web による授業評価アンケートについて、その有効性や問題点を明らかにすることを目的に、携帯電話と PC を利用したテスト実施を行った。開発の過程で、授業評価アンケートだけでなく、教員が授業で任意に利用できる授業内アンケートについても、開発可能なことがわかり、対象に加えた。

実施に協力した教員および学生からは好意的な反応を得ることができ、大学全体の負担軽減や授業評価アンケート以外の学内で実施する各種調査や教員個々人が行なう授業のフィードバック等、多様な場面での活用の可能性が確認された。しかしながら、解決すべき課題も少なくなく、とくに、授業評価アンケート実施については、学内での携帯電話の電波状況の問題があり、全面的な移行は現状では難しいことが分かった。一方、授業内アンケートシステムは、学生とのインタラクティブ性により学生の講義への参加意識の向上に役立つツールとして、新たな教室インフラの可能性が大きく示唆され、今後携帯電話ではないツール（クリッカー等）との比較検討を行った上で、導入に向けた検討を早急に行うべきと考えられる。

2008 年度の授業評価アンケートは、2007 年度に科目選定方針を変更したこと、新しい方針で実施したアンケート結果の経年比較を可能にするため、科目選定方針や調査票など実施の基本的な方針は 2007 年度と同じく実施することとなった。

また、アンケートを全学的な取り組みとして位置付けるため、実施組織を全学教務委員会にうつし、各学部等における実施科目の選定、報告書の作成など実施に関わる事柄は、全学教務委員会で取り扱うこととなった。

さらに、所見票については、教員の負担軽減のため、記入・提出を WEB 上で行うシステ



ムを2008年度中に導入することを決定した。と同時に、学生へのフィードバックの短期化、閲覧の利便を図るため、イントラネット上での所見票の公開についても検討する。

授業評価アンケートの実施内容については、毎年度実施することを前提とすれば、単年度ごとにその目的と実施内容を検討するのではなく、数年度単位の中期的な計画に基づいて展開することが望ましく、今後の課題として挙げておく。その際には、1教員1科目の原則による実施は、教員全員が自らの自己研修の資料を得る観点から、少なくとも数年に一度は必要であるという合意があること、2008年度にはカリキュラム・学習環境アンケートを実施することが決定しているように、他の調査との関連も視野にいれられるべきでありことなどが勘案されなければならない。

また、これまで実施の対象としてこなかったいわゆる専門演習については、教育上大きな意味を持つものであり、その情報収集が重要かつ必要であることが確認されている。しかしながら、専門演習の内容と形態は専門分野および個別教員ごとに多様であり、まずはそのあり方についての議論の深化が望まれること、また、少人数を対象とするアンケートにつきまとうデリケートさにも充分配慮した調査方法が確立されなければならないことから、将来に向けての課題とする。

授業評価アンケートを実施するのは、学生におもねるためでは決してない。授業が厳しく、受講時点での学生の評価が高くなくとも、卒業後一定の年月がたってその良さに気づくこともある。むしろそのほうが、長い目で見て学生の成長にとってプラスとなるであろう。したがって、授業評価アンケートにおける評点それ自体に振り回されるようなことがあってはならない。回答を冷静に分析し、場合によっては、所見票で一部の回答をいさめなければならないこともある。

しかし他方で、授業目的をしっかりと受け止め、食らいついてくる学生も少なくない。そのことが記述にもしっかりと書かれてくる。教員としてホッとする一瞬である。しかるに、そうした部分をもっと集約され、全学的に共有されてもよいのではなかろうか。そのような方向で授業評価アンケートを使うというのが本来のあり方かもしれない。ネガティブチェックのために授業評価アンケートを行っているわけではけっしてなく、授業力向上、大学としての教育力向上のためである。そのためには良さを伸ばすこと、これが基本に据えられるべきであろう。

## 6. 集計データ（資料編）

### 6-1 回答者数

延べ回答者数 76,920名

表1 学部等別履修者数と回答者数、および回答率

科目開設学部等	2007年度			2006年度		
	履修者数	回答者数	回答率	履修者数	回答者数	回答率
文	11,678	7,826	67.01	17,357	9,740	56.12
経済	5,275	3,445	65.31	20,656	7,786	37.69
理	6,825	3,751	54.96	6,446	3,476	54.33
社会	13,970	7,852	56.21	15,400	6,858	44.53
法	19,172	6,483	33.81	20,413	6,787	33.25
経営	14,766	7,446	50.43	4,269	2,553	59.80
観光	8,985	5,305	59.04	7,406	3,777	51.00
コミュニティ福祉	11,881	7,218	60.75	8,427	4,617	54.79
現代心理	4,145	2,845	68.64	1,527	1,096	71.77
全学共通カリキュラム	43,213	21,934	50.76	38,025	17,766	46.72
学校・社会教育講座	3,791	2,815	74.25	4,100	3,011	73.44
合計	143,701	76,920	53.53	144,116	67,467	46.86

注) 履修者数、回答者数は、アンケート実施科目の延べ履修者、回答者

注) 学部等は、アンケート実施科目の開設学部により分類した

注) 2006年度数値に網掛けがある学部等は、実施科目の選定方針を変更した学部等

表2 学部等別学年別の回答者数

科目開設学部等	1年	2年	3年	4年	不明	合計
文	4,294	2,261	751	273	247	7,826
経済	2,680	264	275	121	105	3,445
理	1,253	1,053	1,039	297	109	3,751
社会	2,304	3,221	1,665	488	174	7,852
法	1,437	1,876	2,159	859	152	6,483
経営	2,719	2,608	1,352	526	241	7,446
観光	886	2,719	1,216	401	83	5,305
コミュニティ福祉	2,479	2,553	1,386	567	233	7,218
現代心理	1,674	894	154	35	88	2,845
全学共通カリキュラム	10,251	7,221	2,520	1,324	618	21,934
学校・社会教育講座	1,007	1,075	489	88	156	2,815
合計	30,984	25,745	13,006	4,979	2,206	76,920

注) 回答者数は延べ人数

注) 学年は、当該学部等で実施したアンケートに回答した学生の学年を示す

注) 学部等により実施科目の選定方針が異なるため、学年の偏りがある

## 6-2 科目開設学部等別平均値

表3 文学部 (2007年度平均値)

設 問 項 目	回答者数	平均値	標準偏差
<b>I この授業へのあなたの取り組み方について…</b>			
I 1 授業全体を通じての出席率 (5:90%以上、4:70-89%、3:50-69%、2:30-49%、1:30%未満)	7,794	4.66	0.63
I 2 この授業に積極的に参加した	7,792	3.75	1.02
I 3 この授業の履修にあたって十分な準備ができていた	7,788	3.07	1.06
I 4 授業をきっかけにして発展的な勉強をした	7,769	3.14	1.14
I 5 シラバス (履修要綱の講義内容) は受講に役立った	7,734	3.24	1.07
I 6 授業の予習復習等に毎週当てた時間 (5:3時間以上、4:2-3時間、3:1-2時間、2:1時間未満、1:0時間)	7,763	2.07	1.17
<b>II この授業の進め方は…</b>			
II 1 聞きやすい話し方だった	7,791	3.69	1.12
II 2 各回の授業内容の量が適切だった	7,790	3.72	1.01
II 3 各回の授業のねらいは明確だった	7,778	3.67	1.06
II 4 各回の授業内容は明確だった	7,768	3.71	1.05
II 5 十分な静粛性が保たれた	7,770	3.66	1.19
II 6 教科書・授業レジュメプリントや参考文献が効果的だった	7,764	3.65	1.08
II 7 板書のしかたが適切だった	7,734	3.12	1.07
II 8 映像視覚教材 (ビデオ、OHP、パワーポイントなど) の使用が効果的だった	7,672	3.36	1.19
II 9 教員は授業の準備を周到に行っていた	7,758	3.94	0.96
<b>III この授業から得るものができたこと</b>			
III 1 自分にとって新しい考え方・発想	7,780	3.71	1.05
III 2 授業で扱った分野に関する基本的な専門知識	7,780	3.71	1.00
III 3 自分で調べ、考える姿勢	7,766	3.42	1.09
III 4 授業で扱った内容が持つ、現代に通じる普遍的な意味	7,753	3.48	1.04
<b>IV 総合的にみて、この授業は…</b>			
IV 1 わかりやすい授業だった	7,775	3.62	1.12
IV 2 授業全体の目標が明確だった	7,772	3.65	1.07
IV 3 学問的興味をかきたてられた	7,774	3.62	1.12
IV 4 この授業を受けて満足した	7,772	3.63	1.13
<b>V 学部等による設問</b>			
V 1 この授業の教室の大きさは適切だった	7,416	4.05	1.15
V 2 この授業の受講者数は適切だった	7,423	3.98	1.10

注) 平均値は、各選択肢の評価点を使用して算出 (5:大いにそう思う、4:そう思う、3:どちらともいえない、2:あまりそう思わない、1:そう思わない)

注) 回答者数は延べ人数

表4 経済学部 (2007年度平均値)

設 問 項 目	回答者数	平均値	標準偏差
<b>I この授業へのあなたの取り組み方について…</b>			
I 1 授業全体を通じての出席率 (5:90%以上、4:70-89%、3:50-69%、2:30-49%、1:30%未満)	3,433	4.69	0.61
I 2 この授業に積極的に参加した	3,434	4.00	1.00
I 3 この授業の履修にあたって十分な準備ができていた	3,433	3.19	1.11
I 4 授業をきっかけにして発展的な勉強をした	3,433	3.14	1.14
I 5 シラバス(履修要綱の講義内容)は受講に役立った	3,427	2.98	1.10
I 6 授業の予習復習等に毎週当てた時間 (5:3時間以上、4:2-3時間、3:1-2時間、2:1時間未満、1:0時間)	3,425	2.05	1.17
<b>II この授業の進め方は…</b>			
II 1 聞きやすい話し方だった	3,434	3.65	1.13
II 2 各回の授業内容の量が適切だった	3,431	3.56	1.13
II 3 各回の授業のねらいは明確だった	3,428	3.65	1.07
II 4 各回の授業内容は明確だった	3,429	3.68	1.08
II 5 十分な静粛性が保たれた	3,427	3.51	1.16
II 6 教科書・授業レジュメプリントや参考文献が効果的だった	3,428	3.57	1.11
II 7 板書のしかたが適切だった	3,398	3.09	1.11
II 8 映像視覚教材(ビデオ、OHP、パワーポイントなど)の使用が効果的だった	3,369	3.15	1.21
II 9 教員は授業の準備を周到に行っていた	3,416	3.84	1.04
<b>III この授業から得るものができたこと</b>			
III 1 自分にとって新しい考え方・発想	3,423	3.46	1.05
III 2 授業で扱った分野に関する基本的な専門知識	3,423	3.70	1.00
III 3 自分で調べ、考える姿勢	3,418	3.38	1.05
III 4 授業で扱った内容が持つ、現代に通じる普遍的な意味	3,410	3.44	1.03
<b>IV 総合的にみて、この授業は…</b>			
IV 1 わかりやすい授業だった	3,425	3.57	1.16
IV 2 授業全体の目標が明確だった	3,424	3.65	1.08
IV 3 学問的興味をかきたてられた	3,424	3.39	1.12
IV 4 この授業を受けて満足した	3,420	3.53	1.14
<b>V 学部等による設問</b>			
V 1 (基礎演習) みんなの前で自分の意見を言えるようになった	1,094	3.53	1.10
V 2 (基礎演習) 経済に関する文献を読めるようになった	1,083	3.34	1.04
V 3 (基礎演習) レジュメやレポートを作成できるようになった	1,083	3.65	1.05
V 4 (情報処理系科目) ワードプロソフト(Word)を使いこなせるようになった	1,203	3.64	1.05
V 5 (情報処理系科目) 表計算ソフト(Excel)を使いこなせるようになった	1,239	3.55	1.03
V 6 (情報処理系科目) WEB上からデータをダウンロードし、分析できるようになった	1,230	3.36	1.10

注) 平均値は、各選択肢の評価点を使用して算出(5:大いにそう思う、4:そう思う、3:どちらともいえない、2:あまりそう思わない、1:そう思わない)

注) 回答者数は延べ人数

表5 理学部（2007年度平均値および2006年度平均値）

設問項目	2007			2006			有意差
	回答者数	平均値	標準偏差	回答者数	平均値	標準偏差	
<b>I この授業へのあなたの取り組み方について…</b>							
I 1 授業全体を通じての出席率（5:90%以上、4:70-89%、3:50-69%、2:30-49%、1:30%未満）	3,741	4.67	0.67	3,490	4.60	0.74	**
I 2 この授業に積極的に参加した	3,737	3.82	1.05	3,489	3.81	1.06	
I 3 この授業の履修にあたって十分な準備ができていた	3,738	2.99	1.09	3,486	2.91	1.04	**
I 4 授業をきっかけにして発展的な勉強をした	3,729	3.05	1.15	3,477	3.00	1.12	
I 5 シラバス（履修要綱の講義内容）は受講に役立った	3,722	3.09	1.08	3,471	3.01	1.10	**
I 6 授業の予習復習等に毎週当てた時間（5:3時間以上、4:2-3時間、3:1-2時間、2:1時間未満、1:0時間）	3,731	2.14	1.11	3,481	2.06	1.06	**
<b>II この授業の進め方は…</b>							
II 1 聞きやすい話し方だった	3,738	3.62	1.13	3,486	3.58	1.18	
II 2 各回の授業内容の量が適切だった	3,734	3.60	1.09	3,479	3.53	1.14	*
II 3 各回の授業のねらいは明確だった	3,730	3.68	1.05	3,483	3.64	1.08	
II 4 各回の授業内容は明確だった	3,726	3.66	1.06	3,479	3.63	1.09	
II 5 十分な静粛性が保たれた	3,726	3.64	1.12	3,478	3.79	1.11	**
II 6 教科書・授業レジュメプリントや参考文献が効果的だった	3,715	3.53	1.11	3,474	3.43	1.18	**
II 7 板書のしかたが適切だった	3,707	3.26	1.12	3,467	3.21	1.18	
II 8 映像視覚教材（ビデオ、OHP、パワーポイントなど）の使用が効果的だった	3,681	3.36	1.17	3,452	3.14	1.22	**
II 9 教員は授業の準備を周到に行っていた	3,719	3.95	0.95	3,470	3.88	1.00	**
<b>III この授業から得るものができたこと</b>							
III 1 自分にとって新しい考え方・発想	3,723	3.63	1.04	-	-	-	
III 2 授業で扱った分野に関する基本的な専門知識	3,721	3.64	1.01	-	-	-	
III 3 自分で調べ、考える姿勢	3,723	3.36	1.04	-	-	-	
III 4 授業で扱った内容が持つ、現代に通じる普遍的な意味	3,712	3.40	1.04	-	-	-	
<b>IV 総合的にみて、この授業は…</b>							
IV 1 わかりやすい授業だった	3,719	3.53	1.15	3,477	3.47	1.21	*
IV 2 授業全体の目標が明確だった	3,716	3.65	1.05	3,477	3.58	1.08	**
IV 3 学問的興味をかきたてられた	3,720	3.44	1.11	3,474	3.40	1.15	
IV 4 この授業を受けて満足した	3,715	3.54	1.11	3,475	3.49	1.15	
<b>V 学部等による設問</b>							
V 1 教員は質問・疑問に対し積極的に答えてくれた	3,390	3.91	0.99	3,225	3.93	1.00	

注) 平均値は、各選択肢の評価点を使用して算出（5:大いにそう思う、4:そう思う、3:どちらともいえない、2:あまりそう思わない、1:そう思わない）

注) 回答者数は延べ人数

注) 有意差の\*印は、昨年度と2007年度の平均値に統計的に有意差があることを示す。\*は有意水準5%（ $p < .05$ ）、\*\*は1%（ $p < .01$ ）。IIIは設問項目を変更したため、比較していない。

表6 社会学部 (2007年度平均値)

設 問 項 目	回答者数	平均値	標準偏差
<b>I この授業へのあなたの取り組み方について…</b>			
I 1 授業全体を通じての出席率 (5:90%以上、4:70-89%、3:50-69%、2:30-49%、1:30%未満)	7,837	4.54	0.74
I 2 この授業に積極的に参加した	7,832	3.68	1.02
I 3 この授業の履修にあたって十分な準備ができていた	7,828	2.87	1.02
I 4 授業をきっかけにして発展的な勉強をした	7,827	2.87	1.08
I 5 シラバス (履修要綱の講義内容) は受講に役立った	7,800	3.26	1.05
I 6 授業の予習復習等に毎週当てた時間 (5:3時間以上、4:2-3時間、3:1-2時間、2:1時間未満、1:0時間)	7,823	1.69	0.93
<b>II この授業の進め方は…</b>			
II 1 聞きやすい話し方だった	7,839	3.73	1.12
II 2 各回の授業内容の量が適切だった	7,832	3.75	0.99
II 3 各回の授業のねらいは明確だった	7,825	3.72	1.03
II 4 各回の授業内容は明確だった	7,823	3.73	1.03
II 5 十分な静粛性が保たれた	7,823	3.57	1.14
II 6 教科書・授業レジュメプリントや参考文献が効果的だった	7,816	3.56	1.09
II 7 板書のしかたが適切だった	7,792	3.12	1.11
II 8 映像視覚教材 (ビデオ、OHP、パワーポイントなど) の使用が効果的 だった	7,768	3.43	1.19
II 9 教員は授業の準備を周到に行っていた	7,810	3.99	0.91
<b>III この授業から得るものができたこと</b>			
III 1 自分にとって新しい考え方・発想	7,828	3.64	1.01
III 2 授業で扱った分野に関する基本的な専門知識	7,824	3.67	0.95
III 3 自分で調べ、考える姿勢	7,825	3.16	1.03
III 4 授業で扱った内容が持つ、現代に通じる普遍的な意味	7,806	3.61	1.01
<b>IV 総合的にみて、この授業は…</b>			
IV 1 わかりやすい授業だった	7,816	3.62	1.12
IV 2 授業全体の目標が明確だった	7,810	3.70	1.03
IV 3 学問的興味をかきたてられた	7,818	3.49	1.11
IV 4 この授業を受けて満足した	7,814	3.59	1.11

注) 平均値は、各選択肢の評価点を使用して算出 (5:大いにそう思う、4:そう思う、3:どちらともいえない、2:あまりそう思わない、1:そう思わない)

注) 回答者数は延べ人数

表7 法学部（2007年度平均値および2006年度平均値）

設 問 項 目	2007			2006			有意差
	回答者数	平均値	標準偏差	回答者数	平均値	標準偏差	
<b>I この授業へのあなたの取り組み方について…</b>							
I 1 授業全体を通じての出席率（5:90%以上、4:70-89%、3:50-69%、2:30-49%、1:30%未満）	6,459	4.39	0.91	6,752	4.40	0.91	
I 2 この授業に積極的に参加した	6,455	3.58	1.06	6,765	3.52	1.09	**
I 3 この授業の履修にあたって十分な準備ができていた	6,452	2.82	1.06	6,754	2.71	1.04	**
I 4 授業をきっかけにして発展的な勉強をした	6,443	2.85	1.10	6,745	2.78	1.10	**
I 5 シラバス（履修要綱の講義内容）は受講に役立った	6,420	3.21	1.08	6,727	3.17	1.08	*
I 6 授業の予習復習等に毎週当てた時間（5:3時間以上、4:2-3時間、3:1-2時間、2:1時間未満、1:0時間）	6,448	1.87	0.97	6,748	1.83	0.98	**
<b>II この授業の進め方は…</b>							
II 1 聞きやすい話し方だった	6,452	3.79	1.12	6,754	3.62	1.14	**
II 2 各回の授業内容の量が適切だった	6,448	3.72	1.04	6,741	3.59	1.06	**
II 3 各回の授業のねらいは明確だった	6,450	3.72	1.02	6,731	3.68	0.99	*
II 4 各回の授業内容は明確だった	6,441	3.75	1.03	6,740	3.70	1.00	**
II 5 十分な静粛性が保たれた	6,444	3.84	1.10	6,722	3.81	1.08	*
II 6 教科書・授業レジュメプリントや参考文献が効果的だった	6,435	3.61	1.13	6,723	3.64	1.08	
II 7 板書のしかたが適切だった	6,400	3.13	1.14	6,696	3.04	1.09	**
II 8 映像視覚教材（ビデオ、OHP、パワーポイントなど）の使用が効果的だった	6,349	3.12	1.24	6,642	3.12	1.20	
II 9 教員は授業の準備を周到に行っていた	6,431	3.94	0.96	6,727	3.94	0.94	
<b>III この授業から得るものができたこと</b>							
III 1 自分にとって新しい考え方・発想	6,447	3.63	0.98	-	-	-	
III 2 授業で扱った分野に関する基本的な専門知識	6,444	3.75	0.95	-	-	-	
III 3 自分で調べ、考える姿勢	6,442	3.14	1.01	-	-	-	
III 4 授業で扱った内容が持つ、現代に通じる普遍的な意味	6,434	3.62	0.99	-	-	-	
<b>IV 総合的にみて、この授業は…</b>							
IV 1 わかりやすい授業だった	6,442	3.66	1.10	6,743	3.58	1.11	**
IV 2 授業全体の目標が明確だった	6,439	3.70	1.01	6,735	3.67	1.00	
IV 3 学問的興味をかきたてられた	6,441	3.57	1.06	6,740	3.51	1.07	**
IV 4 この授業を受けて満足した	6,442	3.63	1.08	6,741	3.58	1.08	**

注) 平均値は、各選択肢の評価点を使用して算出（5:大いにそう思う、4:そう思う、3:どちらともいえない、2:あまりそう思わない、1:そう思わない）

注) 回答者数は延べ人数

注) 有意差の\*印は、昨年度と2007年度の平均値に統計的に有意差があることを示す。\*は有意水準5%（ $p < .05$ ）、\*\*は1%（ $p < .01$ ）。IIIは設問項目を変更したため、比較していない。

表8 経営学部 (2007年度平均値)

設 問 項 目		回答者数	平均値	標準偏差
<b>I この授業へのあなたの取り組み方について…</b>				
I 1	授業全体を通じての出席率 (5:90%以上、4:70-89%、3:50-69%、2:30-49%、1:30%未満)	7,420	4.64	0.69
I 2	この授業に積極的に参加した	7,411	3.92	1.03
I 3	この授業の履修にあたって十分な準備ができていた	7,407	3.18	1.10
I 4	授業をきっかけにして発展的な勉強をした	7,401	3.20	1.13
I 5	シラバス(履修要綱の講義内容)は受講に役立った	7,376	3.23	1.08
I 6	授業の予習復習等に毎週当てた時間 (5:3時間以上、4:2-3時間、3:1-2時間、2:1時間未満、1:0時間)	7,395	2.14	1.25
<b>II この授業の進め方は…</b>				
II 1	聞きやすい話し方だった	7,415	3.70	1.16
II 2	各回の授業内容の量が適切だった	7,408	3.65	1.07
II 3	各回の授業のねらいは明確だった	7,399	3.76	1.06
II 4	各回の授業内容は明確だった	7,386	3.76	1.07
II 5	十分な静粛性が保たれた	7,392	3.38	1.27
II 6	教科書・授業レジュメプリントや参考文献が効果的だった	7,381	3.59	1.09
II 7	板書のしかたが適切だった	7,328	3.24	1.10
II 8	映像視覚教材(ビデオ、OHP、パワーポイントなど)の使用が効果的だった	7,383	3.74	1.09
II 9	教員は授業の準備を周到に行っていた	7,384	4.01	0.97
<b>III この授業から得るものができたこと</b>				
III 1	自分にとって新しい考え方・発想	7,398	3.73	1.03
III 2	授業で扱った分野に関する基本的な専門知識	7,397	3.75	1.00
III 3	自分で調べ、考える姿勢	7,397	3.44	1.09
III 4	授業で扱った内容が持つ、現代に通じる普遍的な意味	7,370	3.65	1.02
<b>IV 総合的にみて、この授業は…</b>				
IV 1	わかりやすい授業だった	7,391	3.68	1.14
IV 2	授業全体の目標が明確だった	7,379	3.75	1.07
IV 3	学問的興味をかきたてられた	7,387	3.60	1.12
IV 4	この授業を受けて満足した	7,383	3.66	1.14

注) 平均値は、各選択肢の評価点を使用して算出(5:大いにそう思う、4:そう思う、3:どちらともいえない、2:あまりそう思わない、1:そう思わない)

注) 回答者数は延べ人数



表9 観光学部 (2007年度平均値)

設 問 項 目		回答者数	平均値	標準偏差
<b>I この授業へのあなたの取り組み方について…</b>				
I 1	授業全体を通じての出席率 (5:90%以上、4:70-89%、3:50-69%、2:30-49%、1:30%未満)	5,278	4.59	0.70
I 2	この授業に積極的に参加した	5,291	3.76	0.98
I 3	この授業の履修にあたって十分な準備ができていた	5,281	2.87	1.02
I 4	授業をきっかけにして発展的な勉強をした	5,284	2.89	1.10
I 5	シラバス(履修要綱の講義内容)は受講に役立った	5,255	3.21	1.04
I 6	授業の予習復習等に毎週当てた時間 (5:3時間以上、4:2-3時間、3:1-2時間、2:1時間未満、1:0時間)	5,281	1.71	0.93
<b>II この授業の進め方は…</b>				
II 1	聞きやすい話し方だった	5,292	3.65	1.12
II 2	各回の授業内容の量が適切だった	5,289	3.81	0.96
II 3	各回の授業のねらいは明確だった	5,289	3.74	1.04
II 4	各回の授業内容は明確だった	5,280	3.74	1.06
II 5	十分な静粛性が保たれた	5,280	3.72	1.13
II 6	教科書・授業レジュメプリントや参考文献が効果的だった	5,269	3.57	1.11
II 7	板書のしかたが適切だった	5,243	3.22	1.06
II 8	映像視覚教材(ビデオ、OHP、パワーポイントなど)の使用が効果的だった	5,269	3.65	1.16
II 9	教員は授業の準備を周到に行っていた	5,276	4.08	0.90
<b>III この授業から得るものができたこと</b>				
III 1	自分にとって新しい考え方・発想	5,286	3.74	0.98
III 2	授業で扱った分野に関する基本的な専門知識	5,285	3.75	0.96
III 3	自分で調べ、考える姿勢	5,286	3.21	1.02
III 4	授業で扱った内容が持つ、現代に通じる普遍的な意味	5,278	3.61	0.99
<b>IV 総合的にみて、この授業は…</b>				
IV 1	わかりやすい授業だった	5,284	3.62	1.15
IV 2	授業全体の目標が明確だった	5,281	3.69	1.05
IV 3	学問的興味をかきたてられた	5,285	3.53	1.11
IV 4	この授業を受けて満足した	5,283	3.64	1.10
<b>V 学部等による設問</b>				
V 1	わたしの成績は、観光学部の中で良いほうだ	5,140	2.85	0.99
V 2	わたしは、授業中に、飲食や私語をすることを好ましくないと思う	5,151	3.87	0.97
V 3	わたしは、新座キャンパスで学ぶことに満足している	5,152	3.89	1.10
V 4	わたしは、旅行することが好きだ	5,150	4.48	0.81
V 5	わたしは、この授業を通じて、現代社会における観光の重要性を認識した	5,147	3.44	1.07
V 6	わたしは、この授業を通じて、観光関連の仕事に興味をおぼえた	5,150	3.21	1.12
V 7	わたしは、この授業を通じて、観光を学ぶことにより興味がわいた	5,129	3.36	1.12

注) 平均値は、各選択肢の評価点を使用して算出(5:大いにそう思う、4:そう思う、3:どちらともいえない、2:あまりそう思わない、1:そう思わない)

注) 回答者数は延べ人数

表10 コミュニティ福祉学部(2007年度平均値)

設 問 項 目	回答者数	平均値	標準偏差
<b>I この授業へのあなたの取り組み方について…</b>			
I 1 授業全体を通じての出席率 (5:90%以上、4:70-89%、3:50-69%、2:30-49%、1:30%未満)	7,204	4.55	0.70
I 2 この授業に積極的に参加した	7,200	3.70	1.00
I 3 この授業の履修にあたって十分な準備ができていた	7,180	2.89	1.01
I 4 授業をきっかけにして発展的な勉強をした	7,173	2.92	1.08
I 5 シラバス(履修要綱の講義内容)は受講に役立った	7,135	3.27	1.02
I 6 授業の予習復習等に毎週当てた時間 (5:3時間以上、4:2-3時間、3:1-2時間、2:1時間未満、1:0時間)	7,177	1.58	0.89
<b>II この授業の進め方は…</b>			
II 1 聞きやすい話し方だった	7,194	3.80	1.10
II 2 各回の授業内容の量が適切だった	7,184	3.84	0.96
II 3 各回の授業のねらいは明確だった	7,176	3.77	1.02
II 4 各回の授業内容は明確だった	7,167	3.79	1.02
II 5 十分な静粛性が保たれた	7,165	3.72	1.09
II 6 教科書・授業レジュメプリントや参考文献が効果的だった	7,100	3.73	1.02
II 7 板書のしかたが適切だった	6,977	3.14	1.04
II 8 映像視覚教材(ビデオ、OHP、パワーポイントなど)の使用が効果的 だった	7,072	3.72	1.10
II 9 教員は授業の準備を周到に行っていた	7,139	4.01	0.92
<b>III この授業から得るものができたこと</b>			
III 1 自分にとって新しい考え方・発想	7,186	3.75	1.01
III 2 授業で扱った分野に関する基本的な専門知識	7,164	3.69	0.95
III 3 自分で調べ、考える姿勢	7,178	3.24	1.04
III 4 授業で扱った内容が持つ、現代に通じる普遍的な意味	7,140	3.72	1.00
<b>IV 総合的にみて、この授業は…</b>			
IV 1 わかりやすい授業だった	7,168	3.70	1.11
IV 2 授業全体の目標が明確だった	7,171	3.74	1.03
IV 3 学問的興味をかきたてられた	7,166	3.55	1.12
IV 4 この授業を受けて満足した	7,185	3.67	1.12

注) 平均値は、各選択肢の評価点を使用して算出(5:大いにそう思う、4:そう思う、3:どちらともいえない、2:あまりそう思わない、1:そう思わない)

注) 回答者数は延べ人数

表 1 1 現代心理学部 (2007 年度平均値)

設 問 項 目		回答者数	平均値	標準偏差
<b>I この授業へのあなたの取り組み方について…</b>				
I 1	授業全体を通じての出席率 (5:90%以上、4:70-89%、3:50-69%、2:30-49%、1:30%未満)	2,830	4.61	0.72
I 2	この授業に積極的に参加した	2,833	3.74	1.03
I 3	この授業の履修にあたって十分な準備ができていた	2,833	2.84	1.05
I 4	授業をきっかけにして発展的な勉強をした	2,830	2.89	1.10
I 5	シラバス(履修要綱の講義内容)は受講に役立った	2,815	3.08	1.09
I 6	授業の予習復習等に毎週当てた時間 (5:3時間以上、4:2-3時間、3:1-2時間、2:1時間未満、1:0時間)	2,827	1.80	0.98
<b>II この授業の進め方は…</b>				
II 1	聞きやすい話し方だった	2,832	3.53	1.13
II 2	各回の授業内容の量が適切だった	2,833	3.66	0.99
II 3	各回の授業のねらいは明確だった	2,834	3.62	1.05
II 4	各回の授業内容は明確だった	2,829	3.63	1.06
II 5	十分な静粛性が保たれた	2,826	3.64	1.15
II 6	教科書・授業レジュメプリントや参考文献が効果的だった	2,816	3.49	1.13
II 7	板書のしかたが適切だった	2,806	2.99	1.02
II 8	映像視覚教材(ビデオ、OHP、パワーポイントなど)の使用が効果的 だった	2,817	3.77	1.14
II 9	教員は授業の準備を周到に行っていた	2,823	4.01	0.92
<b>III この授業から得るものができたこと</b>				
III 1	自分にとって新しい考え方・発想	2,826	3.82	0.99
III 2	授業で扱った分野に関する基本的な専門知識	2,828	3.67	0.99
III 3	自分で調べ、考える姿勢	2,827	3.18	1.02
III 4	授業で扱った内容が持つ、現代に通じる普遍的な意味	2,818	3.50	1.02
<b>IV 総合的にみて、この授業は…</b>				
IV 1	わかりやすい授業だった	2,828	3.47	1.15
IV 2	授業全体の目標が明確だった	2,828	3.56	1.06
IV 3	学問的興味をかきたてられた	2,826	3.66	1.13
IV 4	この授業を受けて満足した	2,827	3.60	1.13

注) 平均値は、各選択肢の評価点を使用して算出(5:大いにそう思う、4:そう思う、3:どちらともいえない、2:あまりそう思わない、1:そう思わない)

注) 回答者数は延べ人数

表 1 2 全学共通カリキュラム (2007 年度平均値)

設 問 項 目		回答者数	平均値	標準偏差
<b>I この授業へのあなたの取り組み方について…</b>				
I 1	授業全体を通じての出席率 (5:90%以上、4:70-89%、3:50-69%、2:30-49%、1:30%未満)	21,852	4.59	0.72
I 2	この授業に積極的に参加した	21,860	3.73	1.04
I 3	この授業の履修にあたって十分な準備ができていた	21,826	2.83	1.06
I 4	授業をきっかけにして発展的な勉強をした	21,812	2.81	1.12
I 5	シラバス (履修要綱の講義内容) は受講に役立った	21,753	3.32	1.11
I 6	授業の予習復習等に毎週当てた時間 (5:3 時間以上、4:2-3 時間、3:1-2 時間、2:1 時間未満、1:0 時間)	21,808	1.56	0.92
<b>II この授業の進め方は…</b>				
II 1	聞きやすい話し方だった	21,843	3.85	1.11
II 2	各回の授業内容の量が適切だった	21,843	3.84	1.02
II 3	各回の授業のねらいは明確だった	21,813	3.80	1.05
II 4	各回の授業内容は明確だった	21,803	3.82	1.04
II 5	十分な静粛性が保たれた	21,790	3.47	1.22
II 6	教科書・授業レジュメプリントや参考文献が効果的だった	21,749	3.61	1.11
II 7	板書のしかたが適切だった	21,575	3.17	1.10
II 8	映像視覚教材 (ビデオ、OHP、パワーポイントなど) の使用が効果的だった	21,690	3.79	1.17
II 9	教員は授業の準備を周到に行っていた	21,754	4.10	0.94
<b>III この授業から得るものができたこと</b>				
III 1	自分にとって新しい考え方・発想	21,812	3.73	1.04
III 2	授業で扱った分野に関する基本的な専門知識	21,802	3.62	1.00
III 3	自分で調べ、考える姿勢	21,787	3.05	1.05
III 4	授業で扱った内容が持つ、現代に通じる普遍的な意味	21,739	3.56	1.05
<b>IV 総合的にみて、この授業は…</b>				
IV 1	わかりやすい授業だった	21,790	3.79	1.11
IV 2	授業全体の目標が明確だった	21,781	3.77	1.05
IV 3	学問的興味をかきたてられた	21,778	3.63	1.12
IV 4	この授業を受けて満足した	21,765	3.72	1.12
<b>V 学部等による設問</b>				
V 1	この授業の教室の大きさは適切だった	20,474	3.98	1.16
V 2	この授業の受講者数は適切だった	20,433	3.81	1.17

注) 平均値は、各選択肢の評価点を使用して算出 (5:大いにそう思う、4:そう思う、3:どちらともいえない、2:あまりそう思わない、1:そう思わない)

注) 回答者数は延べ人数

表 1 3 学校・社会教育講座（2007 年度平均値および 2006 年度平均値）

設 問 項 目	2007			2006			有意差
	回答者数	平均値	標準偏差	回答者数	平均値	標準偏差	
<b>I この授業へのあなたの取り組み方について…</b>							
I 1 授業全体を通じての出席率（5:90%以上、4:70-89%、3:50-69%、2:30-49%、1:30%未満）	2,805	4.72	0.57	3,009	4.69	0.56	
I 2 この授業に積極的に参加した	2,801	3.83	0.97	3,008	3.91	0.97	**
I 3 この授業の履修にあたって十分な準備ができていた	2,801	3.04	1.02	3,005	3.08	1.05	
I 4 授業をきっかけにして発展的な勉強をした	2,800	3.05	1.10	2,998	3.05	1.12	
I 5 シラバス（履修要綱の講義内容）は受講に役立った	2,791	3.35	1.05	2,986	3.38	1.07	
I 6 授業の予習復習等に毎週当てた時間（5:3 時間以上、4:2-3 時間、3:1-2 時間、2:1 時間未満、1:0 時間）	2,798	1.71	0.91	3,002	1.70	0.94	
<b>II この授業の進め方は…</b>							
II 1 聞きやすい話し方だった	2,806	4.06	1.01	3,008	4.14	0.96	**
II 2 各回の授業内容の量が適切だった	2,805	4.02	0.94	3,008	4.06	0.94	
II 3 各回の授業のねらいは明確だった	2,802	4.02	0.97	3,006	4.04	0.95	
II 4 各回の授業内容は明確だった	2,799	4.04	0.96	3,002	4.07	0.94	
II 5 十分な静粛性が保たれた	2,801	3.95	1.09	3,005	4.16	0.93	**
II 6 教科書・授業レジュメプリントや参考文献が効果的だった	2,799	3.93	0.98	3,004	3.96	0.94	
II 7 板書のしかたが適切だった	2,799	3.36	1.09	2,995	3.43	1.11	*
II 8 映像視覚教材（ビデオ、OHP、パワーポイントなど）の使用が効果的だった	2,782	3.65	1.17	2,985	3.73	1.15	**
II 9 教員は授業の準備を周到に行っていた	2,792	4.24	0.84	3,004	4.25	0.85	
<b>III この授業から得るものができたこと</b>							
III 1 自分にとって新しい考え方・発想	2,804	3.89	0.97	-	-	-	
III 2 授業で扱った分野に関する基本的な専門知識	2,806	3.89	0.91	-	-	-	
III 3 自分で調べ、考える姿勢	2,800	3.35	1.04	-	-	-	
III 4 授業で扱った内容が持つ、現代に通じる普遍的な意味	2,794	3.81	0.96	-	-	-	
<b>IV 総合的にみて、この授業は…</b>							
IV 1 わかりやすい授業だった	2,804	4.01	1.01	3,006	4.06	0.99	
IV 2 授業全体の目標が明確だった	2,803	3.99	0.98	3,005	4.00	0.98	
IV 3 学問的興味をかきたてられた	2,804	3.66	1.09	3,003	3.71	1.09	
IV 4 この授業を受けて満足した	2,802	3.86	1.05	3,000	3.93	1.04	**

注) 平均値は、各選択肢の評価点を使用して算出（5:大いにそう思う、4:そう思う、3:どちらともいえない、2:あまりそう思わない、1:そう思わない）

注) 回答者数は延べ人数

注) 有意差の\*印は、昨年度と 2007 年度の平均値に統計的に有意差があることを示す。\*は有意水準 5%（ $p < .05$ ）、\*\*は 1%（ $p < .01$ ）。III は設問項目を変更したため、比較していない。

## 6-3 「グループ集計」科目一覧

表14 文学部

### グループ1

No.	科目名	学期
1	入門演習 B1	前期
2	入門演習 B1	前期
3	入門演習 B1	前期
4	入門演習 B1	前期

### グループ2

No.	科目名	学期
1	入門演習 C1	前期
2	入門演習 C1	前期
3	入門演習 C1	前期

### グループ3

No.	科目名	学期
1	入門演習 E1	前期
2	入門演習 E1	前期

### グループ4

No.	科目名	学期
1	入門演習 F1	前期
2	入門演習 F1	前期
3	入門演習 F1	前期

### グループ5

No.	科目名	学期
1	入門演習 G1	前期
2	入門演習 G1	前期
3	入門演習 G1	前期
4	入門演習 G1	前期
5	入門演習 G1	前期
6	入門演習 G1	前期
7	入門演習 G1	前期
8	入門演習 G1	前期
9	入門演習 G1	前期

### グループ6

No.	科目名	学期
1	入門演習 J1	前期
2	入門演習 J1	前期
3	入門演習 J1	前期

### グループ7

No.	科目名	学期
1	入門演習 A1	前期
2	入門演習 A2	後期

### グループ8

No.	科目名	学期
1	演習 G2	後期
2	演習 G4	後期
3	演習 G6	後期
4	演習 G12	後期
5	演習 H2	後期
6	演習 H4	後期
7	演習 H6	後期
8	演習 H8	後期
9	演習 H10	後期
10	演習 I2	後期
11	演習 I4	後期
12	演習 I8	後期
13	演習 I10	後期

### グループ9

No.	科目名	学期
1	基礎演習 2	後期
2	基礎演習 2	後期

### グループ10

No.	科目名	学期
1	入門講義 1	後期
2	入門講義 2	後期

表 1 5 経済学部

グループ1

No.	科目名	学期
1	情報処理入門	前期
2	情報処理入門	前期
3	情報処理入門	前期
4	情報処理入門	前期
5	情報処理入門	前期
6	情報処理入門	前期
7	情報処理入門	前期
8	情報処理入門	前期
9	情報処理入門	前期
10	情報処理入門	前期
11	情報処理入門	前期
12	情報処理入門	前期

グループ2

No.	科目名	学期
1	基礎演習(経済学科)	前期
2	基礎演習(経済学科)	前期
3	基礎演習(経済学科)	前期
4	基礎演習(経済学科)	前期
5	基礎演習(経済学科)	前期
6	基礎演習(経済学科)	前期
7	基礎演習(経済学科)	前期
8	基礎演習(経済学科)	前期
9	基礎演習(経済学科)	前期
10	基礎演習(経済学科)	前期
11	基礎演習(経済学科)	前期
12	基礎演習(経済学科)	前期
13	基礎演習(経済学科)	前期
14	基礎演習(経済学科)	前期

グループ3

No.	科目名	学期
1	基礎演習(経済政策学科)	前期
2	基礎演習(経済政策学科)	前期
3	基礎演習(経済政策学科)	前期
4	基礎演習(経済政策学科)	前期
5	基礎演習(経済政策学科)	前期
6	基礎演習(経済政策学科)	前期
7	基礎演習(経済政策学科)	前期
8	基礎演習(経済政策学科)	前期
9	基礎演習(経済政策学科)	前期
10	基礎演習(経済政策学科)	前期

グループ4

No.	科目名	学期
1	基礎演習(会計ファイナンス学科)	前期
2	基礎演習(会計ファイナンス学科)	前期
3	基礎演習(会計ファイナンス学科)	前期
4	基礎演習(会計ファイナンス学科)	前期
5	基礎演習(会計ファイナンス学科)	前期
6	基礎演習(会計ファイナンス学科)	前期
7	基礎演習(会計ファイナンス学科)	前期
8	基礎演習(会計ファイナンス学科)	前期
9	基礎演習(会計ファイナンス学科)	前期

グループ5

No.	科目名	学期
1	情報処理入門2	後期
2	情報処理入門2	後期
3	情報処理入門2	後期
4	情報処理入門2	後期
5	情報処理入門2	後期
6	情報処理入門2	後期
7	情報処理入門2	後期
8	情報処理入門2	後期
9	情報処理入門2	後期
10	情報処理入門2	後期
11	情報処理入門2	後期
12	情報処理入門2	後期

表 1 6 社会学部

グループ1

No.	科目名	学期
1	社会調査法1	前期
2	社会学データ実習	前期
3	現代社会理論	前期
4	ジェンダーの社会学	前期
5	現代社会変動論	前期
6	公共性の社会学	前期

グループ2

No.	科目名	学期
1	少子社会論	前期
2	家族社会学	前期
3	逸脱の社会学	前期
4	フィールドワークの技法	前期
5	生命・身体社会学	前期
6	社会学史	前期
7	意識変動論	前期
8	保健・医療社会学	前期
9	自己社会学	前期

グループ3

No.	科目名	学期
1	情報科学1	前期
2	国際社会論1	前期

グループ4

No.	科目名	学期
1	多文化社会とアイデンティティ	前期
2	多文化のデータ分析	前期
3	民族文化論	前期
4	パフォーマンス文化論	前期
5	宗教と社会	前期
6	都市生活構造論	前期
7	都市文化政策論	前期
8	都市計画論	前期
9	生活環境論	前期
10	環境教育論	前期
11	公共政策論	前期
12	社会運動論	前期

グループ5

No.	科目名	学期
1	社会学原論	前期
2	社会調査法2	前期
3	社会調査法2	前期
4	社会調査法2	前期
5	マスコミ文章入門	前期
6	外国ジャーナリズム研究(英語)	前期
7	論文エッセイ文章実習	前期
8	情報社会論	前期
9	現代社会論	前期
10	メディア・コミュニケーション論	前期

グループ6

No.	科目名	学期
1	現代政治	前期
2	国際関係論	前期
3	メディア社会特殊講義(1)	前期
4	情報ネットワーク論	前期
5	リスクコミュニケーション論	前期
6	流行論	前期
7	メディア各論2(放送)	前期
8	広告論	前期
9	メディア理論	前期
10	メディアデザイン論	前期
11	メディア・リテラシー	前期

グループ7

No.	科目名	学期
1	社会学原論	後期
2	社会学データ実習	後期
3	社会調査法2	後期
4	成熟社会論	後期
5	比較社会論	後期
6	コミュニケーションの理論	後期
7	質的研究法	後期
8	現代社会と政策	後期
9	社会統計学	後期



### グループ8

No.	科目名	学期
1	高齢社会論	後期
2	共生社会論	後期
3	社会保障論	後期
4	政治学2	後期
5	地域社会学	後期
6	宗教社会学	後期
7	社会階層論	後期
8	ライフコース論	後期
9	現代社会研究2(小集団論)	後期
10	世界システム論	後期
11	計量社会学	後期
12	文化の社会学	後期
13	アイデンティティ論	後期
14	NPO/NGOの社会学	後期
15	シミュレーションの社会学	後期

### グループ9

No.	科目名	学期
1	文化の社会理論	後期
2	社会調査法2	後期
3	社会学原論	後期
4	文化基礎論2	後期
5	国際社会論2	後期
6	現代社会論2	後期
7	多文化の社会理論2	後期
8	都市社会論2	後期
9	環境社会学2	後期
10	社会統計学2	後期
11	消費社会論2	後期
12	情報科学2	後期

### グループ10

No.	科目名	学期
1	教育社会学	後期
2	社会言語学	後期
3	アジア社会論	後期
4	都市と国際化	後期
5	都市とマイノリティ	後期
6	環境と人類	後期
7	災害社会学	後期
8	社会心理学2	後期

### グループ11

No.	科目名	学期
1	社会学原論	後期
2	社会調査法1	後期
3	マスコミ文章実習1(記事)	後期
4	取材・資料収集実習	後期
5	インタビュー法	後期
6	マス・コミュニケーション論	後期
7	ジャーナリズム論	後期
8	情報行動論	後期

### グループ12

No.	科目名	学期
1	メディア社会特殊講義(2)	後期
2	オルタナティブ・メディア論	後期
3	コミュニケーション政策論	後期
4	マス・コミュニケーション史	後期
5	メディア各論1(新聞)	後期
6	ジャーナリズム各論3(映像報道論)	後期
7	エスノメソドロジー	後期

表 1 7 経営学部

グループ1

No.	科目名	学期
1	基礎演習	前期
2	基礎演習	前期
3	基礎演習	前期
4	基礎演習	前期
5	基礎演習	前期
6	基礎演習	前期
7	基礎演習	前期
8	基礎演習	前期
9	基礎演習	前期
10	基礎演習	前期
11	基礎演習	前期
12	基礎演習	前期
13	基礎演習	前期
14	基礎演習	前期
15	基礎演習	前期
16	基礎演習	前期
17	基礎演習	前期
18	基礎演習	前期

グループ4

No.	科目名	学期
1	BL3	後期
2	BL3	後期
3	BL3	後期

グループ2

No.	科目名	学期
1	BL2	前期
2	BL2	前期
3	BL2	前期
4	BL2	前期
5	BL2	前期
6	BL2	前期
7	BL2	前期

グループ3

No.	科目名	学期
1	BL1	後期
2	BL1	後期
3	BL1	後期
4	BL1	後期
5	BL1	後期
6	BL1	後期
7	BL1	後期
8	BL1	後期

表 1 8 観光学部

## グループ1

No.	科目名	学期
1	交流文化論	前期
2	観光事業論2	前期
3	空間情報処理1	前期
4	企業情報分析1	前期
5	マーケティング1	前期
6	組織と人的資源経営1	前期
7	起業論	前期
8	地域研究法1(地理学)	前期
9	交流文学論1	前期

## グループ2

No.	科目名	学期
1	旅行産業論1	前期
2	外食産業論	前期
3	簿記論1	前期
4	ホスピタリティ産業会計学1	前期
5	観光文化論2	前期
6	国内観光論	前期
7	観光地計画論1	前期
8	観光地運営管理論1	前期
9	地域経済論1	前期
10	ホテル産業経営論1	前期
11	観光社会学1	前期

## グループ3

No.	科目名	学期
1	経営戦略論1	前期
2	観光経済学1	前期
3	都市観光論	前期
4	観光政策・行政論1	前期
5	観光文化人類学1	前期
6	観光文化論1	前期
7	トラベル・ジャーナリズム論	前期
8	e-ビジネス論	前期
9	観光地理学1	前期
10	植民地と観光	前期

## グループ4

No.	科目名	学期
1	データ処理1	前期
2	ビジネスコミュニケーション	前期
3	比較文化論1	前期
4	都市計画論1	前期
5	観光地域社会論1	前期
6	景観論	前期
7	観光と自然環境1	前期
8	外国地誌3(北米)	前期
9	地域開発論1	前期
10	ホスピタリティ・マーケティング1	前期
11	サービス・マネジメント	前期
12	多文化共生特別講義1	前期
13	旅行経験分析法	前期
14	言説分析	前期
15	エスニックツーリズム論	前期

## グループ5

No.	科目名	学期
1	データ処理1	前期
2	比較文化論1	前期
3	都市計画論1	前期
4	観光地域社会論1	前期
5	外国地誌3(北米)	前期
6	地域開発論1	前期
7	ホスピタリティ・マーケティング1	前期
8	多文化共生特別講義1	前期
9	言説分析	前期

## グループ6

No.	科目名	学期
1	地域研究法1(地理学)	前期
2	交流文学論1	前期
3	観光地理学1	前期
4	観光社会学1	前期
5	旅行経験分析法	前期
6	言説分析	前期
7	植民地と観光	前期
8	エスニックツーリズム論	前期

### グループ7

No.	科目名	学期
1	経営学総論1	後期
2	観光事業論1	後期
3	観光行動論1	後期
4	観光消費論	後期
5	観光調査法	後期
6	地域研究法2(文化人類学)	後期
7	地域研究法3(社会学)	後期
8	開発と文化	後期

### グループ8

No.	科目名	学期
1	移住と定着	後期
2	エコツーリズム論	後期
3	空間文化論	後期
4	途上国の観光事業	後期
5	地域研究法3(社会学)	後期
6	開発と文化	後期
7	地域研究法2(文化人類学)	後期
8	観光調査法	後期
9	観光事業論1	後期
10	観光行動論1	後期
11	経営学総論1	後期
12	観光消費論	後期

### グループ9

No.	科目名	学期
1	交通・旅行関連法制	後期
2	文化混淆論	後期
3	文化政策論	後期
4	農村観光論	後期
5	投資計画論	後期
6	紀行文学論	後期

### グループ10

No.	科目名	学期
1	コンベンション産業論	後期
2	観光教育	後期
3	外国地誌4(中南米)	後期
4	ツーリストアート論	後期
5	観光地調査法	後期
6	文化展示論	後期
7	外国地誌7(アフリカ)	後期

### グループ11

No.	科目名	学期
1	コンベンション産業論	後期
2	観光教育	後期
3	外国地誌4(中南米)	後期
4	ツーリストアート論	後期

### グループ12

No.	科目名	学期
1	地域研究法2(文化人類学)	後期
2	地域研究法3(社会学)	後期
3	開発と文化	後期
4	移住と定着	後期
5	文化混淆論	後期
6	途上国の観光事業	後期
7	農村観光論	後期
8	文化展示論	後期
9	ツーリストアート論	後期
10	紀行文学論	後期
11	観光教育	後期

表19 コミュニティ福祉学部

グループ1

No.	科目名	学期
1	基礎演習	前期
2	基礎演習	前期
3	基礎演習	前期
4	基礎演習	前期
5	基礎演習	前期
6	基礎演習	前期
7	基礎演習	前期
8	基礎演習	前期
9	基礎演習	前期
10	基礎演習	前期
11	基礎演習	前期
12	基礎演習	前期
13	基礎演習	前期
14	基礎演習	前期
15	基礎演習	前期

グループ2

No.	科目名	学期
1	社会福祉と法	前期
2	児童福祉論	前期
3	家族福祉論	前期
4	福祉機器論	前期
5	※(社会福祉・精神保健福祉)援助技術総論	前期
6	介護概論	前期
7	医学概論	前期

グループ3

No.	科目名	学期
1	高齢者福祉論	前期
2	障害者福祉論1	前期
3	地域福祉論	前期
4	精神医学1	前期
5	精神保健福祉論1	前期
6	医療福祉論	前期
7	福祉カウンセリング入門	前期

グループ4

No.	科目名	学期
1	地球コミュニティ論	前期
2	現代コミュニティ論	前期
3	市民参加論	前期
4	地方自治論	前期

グループ5

No.	科目名	学期
1	健康政策	前期
2	スポーツ政策	前期
3	地方財政論	前期
4	ライフサイクルの心理学	前期
5	まちづくり論	前期
6	質的リサーチ	前期

グループ6

No.	科目名	学期
1	コミュニティ政策入門	後期
2	少子高齢社会論	後期
3	家族政策	後期
4	コミュニティと宗教	後期
5	リサーチ方法論1	後期
6	政策科学	後期
7	福祉政策	後期
8	国際経済論	後期
9	平和学	後期
10	世界と宗教	後期
11	エスニシティ論	後期
12	余暇生活論	後期
13	コミュニティ・ビジネス	後期
14	地球コミュニティ論	前期
15	現代コミュニティ論	前期
16	市民参加論	前期
17	地方自治論	前期

グループ7

No.	科目名	学期
1	児童福祉実践論	後期
2	発達障害論	後期
3	社会福祉法制	後期
4	公的扶助論	後期
5	障害者福祉論2	後期
6	グループワーク	後期
7	精神保健福祉論2	後期
8	精神保健福祉援助技術各論1	後期
9	家族臨床心理学	後期
10	高齢者福祉論	前期
11	障害者福祉論1	前期
12	地域福祉論	前期
13	精神医学1	前期
14	精神保健福祉論1	前期
15	医療福祉論	前期
16	福祉カウンセリング入門	前期

表 2 0 現代心理学部

グループ1

No.	科目名	学期
1	心理学概説1	前期
2	心理学概説2	前期

表 2 1 全学共通カリキュラム

グループ1

No.	科目名	学期
1	メディアと人間・社会	前期
2	歴史と現代	前期
3	文学と歴史	前期
4	論理的思考法	前期
5	歴史と資料	前期
6	表象文化	前期
7	現代社会と人間	前期
8	歴史と社会	前期
9	思索と人生	前期
10	外国文学とキリスト教	前期
11	文学と人間	前期
12	江戸と文学	前期
13	多文化の世界	前期
14	美術の歴史	前期
15	文学と人間	前期

グループ3

No.	科目名	学期
1	宇宙の科学1	前期
2	生命の歩み	前期
3	物質の科学2	前期
4	行動の科学	前期
5	宇宙の科学2	前期
6	宇宙の科学1	前期
7	人類の進化	前期
8	生命操作と人権	前期
9	自然環境と人間	前期
10	宇宙の科学2	前期
11	生命の科学	前期
12	生物の多様性	前期
13	脳と心	前期
14	地球の理解	前期
15	地球環境の未来	前期

グループ2

No.	科目名	学期
1	マイノリティと宗教	前期
2	食の安全性と行政の対応	前期
3	現代社会とツーリズム	前期
4	政治とマスコミ	前期
5	日本国憲法	前期
6	経営学の世界	前期
7	個人と社会	前期
8	グローバリゼーションと平和	前期
9	現代社会と法	前期
10	朝鮮半島と日本	前期
11	都市と政策	前期
12	市場と社会	前期
13	世界経済と日本	前期
14	ジェンダーと平和	前期
15	企業と社会	前期

グループ4

No.	科目名	学期
1	認知・行動・身体	前期
2	対人関係の心理	前期
3	心の科学	前期
4	スポーツと文化	前期
5	スポーツの科学	前期
6	対人関係と自己理解	前期
7	対人関係の心理	前期
8	対人関係の心理	前期
9	身体コンディショニング論	前期
10	心の健康	前期
11	からだの科学	前期
12	認知・行動・身体	前期
13	からだの科学	前期
14	健康の科学	前期
15	支え合いの諸相	前期

### グループ5

No.	科目名	学期
1	表象文化	後期
2	キリスト教と諸思想	後期
3	現代社会と人間	後期
4	性倫理とキリスト教	後期
5	メディアと人間・社会	後期
6	生態系と人間の未来	後期
7	文学と社会	後期
8	美術の歴史	後期
9	現代社会と人間	後期
10	美術の歴史	後期
11	文学と社会	後期
12	歴史と社会	後期
13	思索と人生	後期
14	音楽と社会	後期
15	キリスト教音楽	後期
16	文学と歴史	後期
17	文学と歴史	後期
18	多文化の世界	後期

### グループ7

No.	科目名	学期
1	健康の科学	後期
2	対人関係の心理	後期
3	栄養の科学	後期
4	癒しの科学	後期
5	対人関係の心理	後期
6	スポーツと文化	後期
7	スポーツの科学	後期
8	支え合いの諸相	後期
9	スポーツの科学	後期
10	ストレスマネジメント	後期
11	高齢化社会におけるヒトの弱点と予防法	後期
12	レジャー・レクリエーションと現代社会	後期
13	心の健康	後期
14	からだの科学	後期
15	心の健康	後期
16	認知・行動・身体	後期
17	パーソナリティの心理	後期
18	支え合いの諸相	後期

### グループ6

No.	科目名	学期
1	福祉と人間	後期
2	持続可能な社会と平和	後期
3	現代社会とツーリズム	後期
4	スポーツジャーナリズムの現在	後期
5	経営学の世界	後期
6	個人と社会	後期
7	経営学の世界	後期
8	少年法の現在	後期
9	政治と社会	後期
10	市場と社会	後期
11	情報と倫理	後期
12	日本国憲法	後期
13	企業と社会	後期
14	平和とは何か	後期
15	東アジア共同体の可能性	後期
16	立教大学の歴史	後期
17	現代社会と環境	後期
18	日本国憲法	後期

### グループ8

No.	科目名	学期
1	生命の科学	後期
2	行動の科学	後期
3	行動の科学	後期
4	宇宙の科学1	後期
5	自然保護最前線	後期
6	情報科学B	後期
7	都市と野鳥	後期
8	情報科学B	後期
9	生物の多様性	後期
10	行動の科学	後期
11	情報科学A	後期
12	宇宙の科学2	後期
13	宇宙の科学2	後期
14	都市環境と人	後期
15	生命のしくみ	後期
16	人類の進化	後期
17	数学の世界	後期



教育調査の検討グループ（2008年11月現在）

座長	菊地	進	（総長補佐、経済学部）
	白石	典義	（経営学部長）
	山口	和範	（入学センター長、経営学部）
	井川	充雄	（社会学部）

2007年度「学生による授業評価アンケート」実施委員会

座長	大野	久	（学校・社会教育講座）
	横山	和弘	（理学部）
	野呂	芳明	（社会学部）
	毛谷村	英治	（観光学部）
事務局	今田	晶子	（大学教育開発・支援センター）
	伊藤	直子	（大学教育開発・支援センター）
	間中	賢治	（教務事務センター）

分析協力

大学教育開発・支援センター

副センター長*	大野	久	（学校・社会教育講座）
学術調査員	茂垣	まどか	

\*2008年3月まで

2007年度「学生による授業評価アンケート」報告書

---

2008年11月発行

編集 立教大学 2007年度「学生による授業評価アンケート」実施委員会

発行 立教大学 大学教育開発・支援センター

〒171-8501 東京都豊島区西池袋3-34-1

TEL 03-3985-4624 FAX 03-3985-4615

<http://www.rikkyo.ac.jp/aboutus/philosophy/activism/CDSHE/>

e-mail cdshe@grp.rikkyo.ne.jp

印刷 株式会社 ナナオ企画

〒104-0043 東京都中央区湊1-6-11

TEL 03-3297-2805 FAX 03-3297-2807